

市民社会をつくる
ボランティア
フォーラム
TOKYO2024

報告書

希望ある
未来をつくる



2024年

2/9金・10土・11日

3日間にわたり、様々な社会問題に
焦点をあてた20の分科会を開催します。

会場 飯田橋セントラルプラザ及びオンラインほかで開催

参加費 1分科会：1,000円 学生または18歳未満の方は無料
会場参加・フィールドワークの3分科会以上は3,000円均一
(オンラインへの変更不可)

主催 東京ボランティア・市民活動センター

企画運営 市民社会をつくるボランティアフォーラム TOKYO2024実行委員会

後援 東京都、特定非営利活動法人日本NPOセンター、武蔵野市

特別協賛 華為技術日本株式会社（ファーウェイジャパン）、西武信用金庫、株式会社三菱UFJ銀行

協賛 NEC ネットエスアイ株式会社、公益財団法人SOMPO環境財団、公益財団法人SOMPO福祉財団、社会福祉法人テレビ朝日福祉文化事業団、東京都生活協同組合連合会、公益財団法人日本社会福祉弘済会、公益財団法人日本テレビ小鳩文化事業団、株式会社熊谷組、特定非営利活動法人モバイル・コミュニケーション・ファンド

協力 社会福祉法人清水基金、生活協同組合パルシステム東京、中央労働金庫、モンデリーズ・ジャパン株式会社



フォーラムホームページ：http://tvac.or.jp/vf/

ボランティアフォーラム

Facebook @voluntaryforumtokyo
(市民社会をつくるボランティアフォーラム Tokyo)

X (旧 Twitter) @voluntaryforum

Instagram @voluntaryforum

お問い合わせ 東京ボランティア・市民活動センター TEL：03-3235-1171 FAX：03-3235-0050

はじめに

東京ボランティア・市民活動センターでは、「ボランティアまつり」「ぼらんていあ・めっせ」、2004年からは「ボランタリーフォーラム」と名前を変えながらも、開設当初より、ボランティアや市民活動に関わる方や関心のある方が集い、つながる場をつくってきました。また今年度の開催で20回目の節目を迎えることになりました。

今年度の「市民社会をつくるボランタリーフォーラム TOKYO2024」（以下、「Vフォーラム」）では、「希望ある未来をつくる」をテーマに、20の分科会と、交流会・クロージング、2つの企画展を実施し、参加者、登壇者、ボランティア、実行委員、スタッフを合わせのべ742名の方にご参加いただきました。

本報告書には、それぞれの分科会の開催目的や様子、分科会を通して伝えたかった実行委員の想いや参加者の声、実施しての成果やこれからの課題が掲載されています。また、職種や年齢も異なる多様な実行委員会メンバーが、議論を重ねながら、Vフォーラムの形を作り上げてきた記録も同時に収められています。

より多くの方が本報告書を目にすることによって、誰もが笑顔で過ごすことができるような社会を築いていくための、一人ひとりにとってのきっかけや新たな一歩となることを願っています。

東京ボランティア・市民活動センター

もくじ

はじめに

第1章 企画編

市民社会をつくるボランタリーフォーラム TOKYO2024 ができるまで・・・・・・・・・・	2
--	---

第2章 実施編

市民社会をつくるボランタリーフォーラム TOKYO2024 開催概要・・・・・・・・・・	6
--	---

各プログラム実施報告

01 学生サミット～当たり前ってなんだ？～・・・・・・・・・・・・・・・・・・	8
02 ギャップを埋めたい！「制度のはざまの子どもたち」の人権を守るには？・・・・・・・・	10
03 ボランティア活動で越境学習を実感しよう・・・・・・・・・・・・・・・・・・	12
04 子ども・若者ケアラー（ヤングケアラー）支援を考える ～支援のあり方、支援の進め方、当事者の経験も踏まえて～・・・・・・・・・・	14
05 Ally（アライ）として何ができる？ ーLGBTQ フレンドリーなコミュニティづくりを考えるー・・・・・・・・・・	16
06 若者の政治参加を考える・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	18
07 「日本を再び戦場としないために」市民のできることを考える・・・・・・・・・・	20
08 タブーにしない！虐待について話して知ろう・・・・・・・・・・・・・・・・・・	22
09 居場所づくりの中で「災害」を考えませんか？ ～普段のつながりづくりからできること～・・・・・・・・・・・・・・・・・・	24
10 共感される NPO になろう～企業や行政との協働、助成金の活用～・・・・・・・・・・	26
11 アート×居場所 ～アートを介してコミュニケーションを深めよう～【フィールドワーク】・・・・・・・・	28
12 図書館という公的な空間から新しい出会いを考える ～図書館×「やさしい日本語」×共生～【フィールドワーク】・・・・・・・・・・	30
13 おひとりさま（あるいは頼れる人のいない）高齢者の終活支援を考える・・・・・・・・	32

14	多文化共生のイマを知る～多文化共生の「自分ごと化」～	34
15	ボランティア・市民活動推進のあり方と未来を考える	36
16	交流会「ミ・ラ・イ☺カフェ」	38
17	10年後の「超ボランティア社会」を想像する	40
18	暮らしに合わせた在宅避難を考えよう！～私の備えと、みんなの備え～	42
19	対話：健康（ウェルビーイング）と社会貢献	44
20	ストップ！食品ロス～私たちにできることを考えよう～	46
21	中学生・高校生のボランティア活動発表会～学校での取組みを知ろう～	48
22	クロージング「ボランタリーフォーラム第20回記念講演」	50
23	ふれあい満点市場～NPO・NGOの作品展示販売～	54
24	情報誌『ネットワーク』表紙原画展	55
	（参考）	
	市民社会をつくるボランタリーフォーラム開催状況	56
	実行委員会名簿	57
	協賛・協力団体・ボランティアでご協力いただいたみなさま	58
	ボランタリーフォーラムにご協力いただいたみなさま	60

<第 1 章>

企 画 編

市民社会をつくるボランタリーフォーラム TOKYO2024 ができるまで

市民社会をつくるボランタリーフォーラム TOKYOとは？

市民社会をつくるボランタリーフォーラム TOKYO（以下、「Vフォーラム」）は、私たちの暮らしに関わるさまざまな「社会課題」に焦点をあて、それを共有し、私たち市民にできることを考えていくためのイベントとして2004年から始まり、今年で20回目となりました。

初回から一貫して、分野、地域、セクターを横断したボランティア・市民活動にかかわるメンバーで実行委員会を組織し、ボランティア・市民活動をする中で直面する課題や想いをもとに企画・運営しています。分科会を通して、想いや考えを共有し、参加者や実行委員のそれぞれの一歩につながることを目的としています。

実行委員会について

Vフォーラムの今年度の方向性を検討するために、まず準備会を開催しました。準備会は、長年Vフォーラムに関わっている少数のメンバーで構成され、これまでのVフォーラムを振り返るとともに、今年度の方向性や運営、実行委員会のあり方などについて話し合いました。

実行委員会は、準備会での話し合いをふまえ、さまざまな分野・地域から集まったメンバーで立ち上げ、取り組んでみたい社会問題についてのグループワーク、テーマ決め、分科会に関する話し合いを行いました。実行委員会は、振り返りの回を含め、11回開催しました。



第1回実行委員会の様子。今年度も、会場とオンラインのハイブリッド開催になりました。

第1回の実行委員会では、実行委員がボラン

ティア・市民活動の中で感じている、今気になること・共有したい社会課題を、キーワードとして出しました。ハイブリッド開催となるため、会場では付箋を貼り、オンラインではチャットに意見出しを行いました。その後、出し合ったキーワードをグループディスカッションでより深め、それをもとに各自で分科会企画案を作成しました。

その後、4つのグループに分かれ、各分科会の企画から当日の運営まで、何度も話し合いを重ね、助け合いながらVフォーラムをつくりました。企画者の考えだけでなく、他の実行委員のさまざまな意見を加えていくことで、よりブラッシュアップされた分科会ができあがっていきます。こうした分科会の企画を進めると同時に、Vフォーラム全体に関わる運営については、「部会」で話し合いを進めました。

今年度の部会は、Facebook やX・Instagram など SNS の活用や PR 動画を作成する「広報部会」、クロージングの企画を行う「全体会部会」、アンケートの活用やファンドレイジングに関する検討を行う「マーケティング部会」、参加者同士の交流の場や実行委員間の交流会を企画する「交流会部会」の4つの部会を設けました。

アンケートでは、回答者85名のうち、52名の方が「初めて参加した」と回答しており、Vフォーラムが皆さんの活動の一步を進める後押しになればと思います。アンケートでは、「自分とは全く違う意見を聞くことができて、おもしろかったです。」「知る事の大切さを実感しました。伝えられる人間になっていければと思います。」「ここまでたくさんの参加者がそれぞれの関心にそって来られているとは思いませんでした。勇気づけられました。」「新しい意見がたくさん聞けたので、新しい学びになった。」などのご意見が寄せられました。

分科会企画案の公募

これまでのVフォーラムにない視点や分野、課題を取り入れ、より幅広い社会的テーマで分科会を企画することをねらいとして、分科会企画案を公募しています。分科会企画案の公募が採用された場合も、案をそのまま実施するのではなく、公募の提案者も実行委員となり、他の分科会企画と同様、実行委員会で内容を検討し、多様な考え・意見を取り入れた上で、内容を磨き上げていきます。また、他の分科会についても共に内容を検討し、Vフォーラム全体の運営にも関わります。

募集概要と実施結果

【内容】 ・ボランティアフォーラムのプログラムの一つとして分科会企画案に基づいた社会課題の発信機会の提供 ・2024年2月9日（金）～11日（日）の内1コマ ・予算は、30,000円まで など 【条件】 ・月1回程度、平日夜間に開催される実行委員会への参加が可能であること ・企画案をもとに、実行委員会の中で一緒に議論・検討し、企画を作り上げ、実施に向けて協力していけること ・フォーラム当日の3日間に出席し、他の分科会準備、運営も含め協力いただけること など 【応募方法】 ・所定の企画書（A4サイズ2枚）に記載の上、郵送・メールにて申込み 【応募説明会】 2023年6月8日（木）19時～20時 【応募期間】 2023年6月1日（木）～6月30日（金） 【結果通知】 2023年7月5日（水）	実施結果 ・応募 2件 ・採用 2件 ・応募者所属内訳 - 地区社会福祉協議会・・・・・・・・・・ 1人 - その他・・・・・・・・・・・・・・・・ 1人
	選考のポイント ・社会課題をテーマにした企画である ・広く一般を対象にした企画である ・多様な市民の参加が期待される企画である ・本フォーラムで波及効果が期待される企画である ・個人や所属団体だけでは実現が難しく、他団体との連携・協働が求められるような企画である ・自団体で既に行っている、または行うことのできる企画ではない

<第 2 章>

実 施 編

市民社会をつくるボランティアフォーラム TOKYO2024 開催概要

趣旨

「市民社会をつくるボランティアフォーラム TOKYO」は、私たちの暮らしに関わるさまざまな社会問題に焦点をあて、私たち市民にできることを考えるイベントとして、2004 年から開催しており、今回で 20 回目となります。企画運営は実行委員会形式で、分野、地域、セクターを横断したボランティア・市民活動に関わるメンバーで構成しています。

毎年、参画した実行委員同士で問題意識を持ち寄り、協議を重ね、いま取り組みたい社会課題などを発信しています。

数年にわたって猛威を振るった新型コロナウイルスは、私たちの生活に大きな爪痕を残しました。街には活気が戻りつつあるようにみえますが、人と人とのつながりは希薄化し、孤独・孤立が進んでいます。また、世界で多発する自然災害や終わりの見えない紛争・戦争が起きるなど、混沌とした状況が続いています。

一方で、このような多様で複雑化する社会と向きあい、課題解決に向けて行動する市民活動も広がりをみせています。そこで、私たち実行委員会では、未来に向けて希望をもち、ともに考え行動していきたいとの思いから、今年のテーマを「希望ある未来をつくる」としました。

私たち一人ひとりが自分ごととして今後の「市民社会」を描くきっかけとなるような場にします。みなさんとお会いすることを楽しみにしています。

開催概要

テ ー マ	希望ある未来をつくる
開 催 期 日	2024 年 2 月 9 日（金）19：00～21：00 2 月 10 日（土）9：30～20：00 2 月 11 日（日）9：30～17：30
会 場	飯田橋セントラルプラザ及びオンライン（Zoom）ほか
主 催	東京ボランティア・市民活動センター
企画運営	市民社会をつくるボランティアフォーラム TOKYO2024 実行委員会
後 援	東京都、特定非営利活動法人日本 NPO センター、武蔵野市
参 加 費	1 分科会 1,000 円 会場参加・フィールドワークの 3 分科会以上は 3,000 円均一 学生または 18 歳未満の方 無料

参加者のべ数	452 名
出演者	84 名
実行委員・運営スタッフ・ボランティアのべ	206 名
全参加者のべ数	742 名

■スケジュール

日	時間	会場	分科会
2月9日 (金)	19:00～21:00	12 階 AB 会議室	1 学生サミット～当たり前ってなんだ？～
		12 階 CD 会議室	2 ギャップを埋めたい！「制度のはざまの子どもたち」の人権を守るには？
		10 階 AB 会議室	3 ボランティア活動で越境学習を実感しよう
2月10日 (土)	9:30～12:00	12 階 AB 会議室	4 子ども・若者ケアラー（ヤングケアラー）支援を考える ～支援のあり方、支援の進め方、当事者の経験も踏まえて～
		12 階 CD 会議室	5 Ally（アライ）として何ができる？ ーLGBTQ フレンドリーなコミュニティづくりを考えるー
		10 階 AB 会議室	6 若者の政治参加を考える
		4 階 都民連会議室	7 「日本を再び戦場としないために」市民のできることを考える
	13:30～15:30	12 階 AB 会議室	8 タブーにしない！虐待について話して知ろう
		12 階 CD 会議室	9 居場所づくりの中で「災害」を考えませんか？ ～普段のつながりづくりからできること～
		10 階 AB 会議室	10 共感される NPO になろう～企業や行政との協働、助成金の活用～
		武蔵野ブレイス（武蔵野市）	12 図書館という公的な空間から新しい出会いを考える ～図書館×「やさしい日本語」×共生～【フィールドワーク】
	15:00～17:00	岡 さん の い え TOMO（世田谷区）	11 アート×居場所 ～アートを介してコミュニケーションを深めよう～【フィールドワーク】
	16:30～18:30	12 階 AB 会議室	13 おひとりさま（あるいは頼れる人のいない）高齢者の終活支援を考える
		12 階 CD 会議室	14 多文化共生のイマを知る～多文化共生の「自分ごと化」～
		10 階 AB 会議室	15 ボランティア・市民活動推進のあり方と未来を考える
	19:00～20:00	12 階 A～D 会議室	16 交流会「ミ・ラ・イ ☺ カフェ」（参加費無料）
2月11日 (日)	9:30～12:00	12 階 AB 会議室	17 10 年後の「超ボランティア社会」を想像する
		12 階 CD 会議室	18 暮らしに合わせた在宅避難を考えよう！～私の備えと、みんなの備え～
		10 階 AB 会議室	19 対話：健康（ウェルビーイング）と社会貢献
	13:30～15:30	12 階 CD 会議室	20 ストップ！食品ロス～私たちにできることを考えよう～
		10 階 AB 会議室	21 中学生・高校生のボランティア活動発表会～学校での取組みを知ろう～
	16:00～17:30	12 階 A～D 会議室	22 クロージング 「ボランタリーフォーラム第 20 回記念講演」 （参加費無料）

■特別企画

2月10日（土）・11日（日） 11:00～15:00	1 階区境ホール	ふれあい満点市場～NPO・NGO の作品展示販売～
開催期間中いつでも	10 階フロア	ボランティア・市民活動情報誌『ネットワーク』展

No.1 学生サミット ～当たり前ってなんだ？～

開催目的

「当たり前」は一人一人の日常に馴染みすぎていて、言葉に表したり、この単語に内在された人々の営みについて語ることは多くありません。だから、今の社会や学校生活で何気なく守っているルールについて今の学生はどんな考えを持っているのかを教育学の視点から掘り下げてみたいと感じたからです。また、他大学の生徒とスポーツなどでつながる機会はあるものの、ボランティアや自分の好きな学問分野で交流をすることはほとんどないと感じています。そこで分科会を通して、学生同士のつながりのきっかけづくりの場になればいいなという願いもあります。参加者にとって「当たり前」を疑うきっかけになれば良いと考えています。

開催日時

2月9日（金）19：00～21：00

参加者数

35名（参加者28名：うちオンライン10名 会場18名、出演者2名、スタッフ5名）

出演者

池田 賢市さん（中央大学文学部教育学専攻 教授）

水野 佐知子さん（中央大学文学部 特任助教）

内容・成果・課題

1. 池田教授による現代の日本の教育・教育観の説明

学校は生徒が持っている自由を享受する権利を保障できているのか？フレイレとイリイチという哲学の教育観を、資料をもとに学びました。学校に行って学んだことだけが「正しい学び」と捉えられているのならば、映画を見たり海外に行って獲得した英語は「間違った学び」なのか。点数をつけたり、ABCの評価をつけたりして測ることができる学びが「良い」学びなのか。などさまざまなお話をいただきました。

2. 水野教授による日本の小学校教育の例示

水野教授が勤めていた小学校の様子を伝えていただきました。社会の目や先生たちの都合により禁止されていることだらけの今の小学校のルールは、子どもたちの楽しみや興味の芽を摘んでいます。学ぶ場所の自由・学び方の自由・選択する権利を尊重した学級の様子に参加者は興味津々でした。

3. グループディスカッション①「できる・できないってなんだ？」

できる子が褒められたり、良い子のレッテルを貼られて、できない子が叱られたり悪い評価を受けることが多いですが、「何ができる・できない」のでしょうか。学校での経験などを話し合いながらグループごとに考えました。多くの方が初対面にも関わらず、自分の学校生活を思い出しながらたくさんの意見が飛び交いました。参加者には、今まで自分が普通だと思っていたことが普通ではないことを知り驚いている方もいて、刺激の多い10分間になりました。

（1）各グループの意見

メイクやゲームなど、自分の好きなことや長所を学校で禁止されるのは学校に行きたい気持ちが低減してしまう。学校のルールは改訂を繰り返すものではないから、今あるルールをどうかいくぐるかに力を入れている生徒がいるのではないかという意見や、小学生の時は元気がいい子が見本になったり良い評価を受けるが、中学高校では生徒指導の対象になることもあり、良い評価や世間の「いい子観」が変わるのは不思議だという意見が出ました。また、学校やクラスの主人公は生徒であるのに、先生が求め



る正解を考え、発言できた子が良い子となると、ある1人の大人の価値観が子どもの学習に色濃く反映されてしまうのではないかという意見も出ました。

(2) ディスカッションのフィードバック

できるできない論から、なぜ体育で苦手なことはできなくても許されるのに、算数や漢字などは苦手でもできるようにならなくてはいけないのかについてや能力の多様性などお話しいただきました。

4. グループディスカッション②「わかる・できるの違いとは？」

一問一答方式の学習は短時間で多くの単語を効率的に学ぶときに使われます。これは知識の定着には良い方法ですが、学習者は何を理解したかに着目することはあまりありません。「学ぶとは何か」というテーマに沿って池田教授の体験を交えながら問題提起をしていただきました。



(1) 各グループの意見

「わかっている」という状況は主観的なものであり、言葉にしたり行動にすることで初めて評価ができるのではないかという意見や、テストの時に時間をかけて解ければ正解に辿り着くのに、時間内に解ききれないから不正解（できていない、わかっていない）と同じ評価をされるのはおかしいのではないか。その代わりに、早押しクイズのようなその場しのぎの表面的な知識だけで多くのことは評価されている現状があるのではないか。という意見や、できるとわかるは、相手に伝わるのであればほとんど同じであると考える人もいれば、自分が思う正解を書いても作問者が必要としたワードや知識がなければ0点の評価をされるのであれば別物であると考える人もいました。

(2) フィードバック

評価と教育は切っても切り離せないものになっていて、本当は数値化できないような態度だったり学んでいる姿も数値化するのは、子どもたちにとって良いのかについて水野教授がお話しくれました。池田教授は、フランスでは、成績は教員だけでつけるのではなくその話し合いに子どもも参加して、意見を言える権利を平等に保障しているといった他国の教育事情をお話をいただきました。

5. 成果と課題

「当たり前」という抽象的なテーマについてどのように話が進んでいくのか少し不安だったのですが、年齢の壁を超えて、様々な考えを持った人たちと語る場になっていてよかったです。出てくるキーワードが少し難しかったり、問いを味わうには時間が足りなかったりしたのですが、良い学びの時間になったと思います。

参加者の声（アンケート結果などから）

- ・学びの場の中で“普通”とされていることが、本当に正しいのか今まで“生徒”の一人として疑問に思ったことはなかったけれど、今回改めて振り返って考えてみて、新しく気付く“疑問点”がありました。
- ・テストの点数が高くて点数が低くて間違えてるところをやり直してる方が理解してるっていうことを聞いてとても心に響きました。

企画・運営

秋本 美帆（中央大学文学部）【主担当・報告書】

犬塚 尚樹（NPO 法人ふれあいの家 おばちゃんち）【副担当】

No.2 ギャップを埋めたい！ 「制度のはざまの子どもたち」の人権を守るには？

開催目的

日本では、障害の種別や状態によって障害者手帳がもらえません。それにより適切な支援がされない人たちがいます。そんな制度からもれた、「はざまの子どもたち」の教育や生活などを知り、人権的視点を持った仕組みづくりを学びました。

開催日時

2月9日（金）19：00～21：00

参加者数

30名（参加者21名：うち会場12名、オンライン9名、出演者2名、スタッフ7名）

出演者

崔 栄繁さん（認定NPO 法人 DPI 日本会議）

添田 洋美さん（LiD/APD 当事者会 imua（東京））

内容・成果・課題

1. 内容

（1） 添田さん（制度のはざまの子どもたちを取り巻く環境や現状について）

①聴覚情報処理障害の特徴と聴力検査、学校生活、支援機器購入の問題点と課題

聴覚情報処理障害は、音は聞こえ、言葉の理解が困難ではあるが、通常の聴力検査では「異常なし」とされる為に、手帳の対象にはならない聴覚障害です。

学校では、授業中に聞いていないと誤解を受け、友達とのコミュニケーションに困難が生じることもあります。学習に遅れが生じる可能性もあり、教室の環境を整える必要があります。また、補聴援助システムの利用が有益ですが、高価な為、購入にはハードルがあります。今後、援助が求められます。



（2） 崔さん（制度のはざまの子どもたちの人権を守る動き方について）

①日本の障害者を取り巻く現状

先進国等での障害者の数は、15～20%を超えるのに対し、

日本では7.6%程度です。これは、手帳所持者のみの数字であり、

サービスが受けられない人が存在します。また、行政や教育機関が障害者差別解消法を理解していないことで、狭間を生む一因になっている現状もあります。

②戦後の障害者運動の歩み

1970年代は、障害当事者主体の運動が盛んとなり、

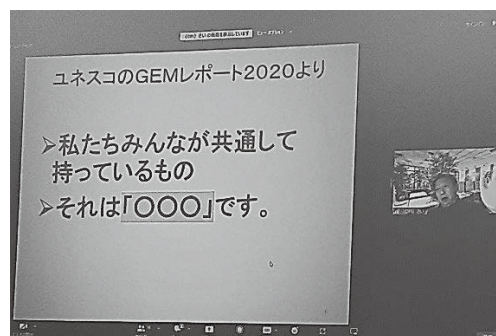
1979年には盲・ろう・養護学校の義務化に伴い反対運動が起きました。1980年代の自立生活運動、1990年代は、交通機関のアクセシビリティ運動や知的障害・精神障害の運動も盛り上がった時代です。2000年代は障害者権利条約の時代となり、2004年に障害者団体ネットワーク「日本障害フォーラム」が誕生し、2014年には障害者権利条約が批准されました。

③障害者権利条約批准の為に大幅改正をした『障害者基本法』

11の分野を大幅に改定しました。障害者差別解消法の制定や教育関連の法律の改正等があります。

④障害者権利条約の大切な考え方『社会モデル／人権モデル』

障害があり、教育等を受けられない場合、「障害」のせいではありません。障害は人類の多様性の一部的ため、差別されるべきではなく、合理的配慮を求める権利があります。



⑤障害者権利委員会の日本に対する総括所見から見る、日本の課題

日本は、93の勧告所見があり、強い要請として、脱施設、障害の程度による支給決定の改善やインクルーシブ教育の実現等があります。

親が子どものために要望することは、わがままではなく、実際には認められるべき権利であることが証明されました。

日本は、学力偏重や厳しい管理体制による行きづらい学校が増えています。子どもの数は減っているが、特別支援学校や特別支援学級に通う子どもが増加、不登校児は特に増加しています。通常学級の支援の在り方に問題もあります。目指すべきは、すべての子どもが通常学級に行ける、どこに行っても支援が受けられる環境を整え、通級や特別支援学級へも選択できる仕組みを作ることです。

⑥制度の「はざま」を埋めるためのヒント

障害者運動の経験を学び、障害者権利条約の理念や、法制度をきちんと知ることは大切です。合理的配慮は、法的概念であり、方向性が間違えていなければ、障害者に限らず他の人々にも適用可能なものになります。

2. 質疑応答

Q1. 自閉症当事者です。支援のない中で育ち、精神疾患を発症し、緩解。30歳過ぎて仕事に就きました。雇用条件で手帳の有無が重視され、手帳のない障害を持つ人が雇用されにくい現状を見ると、能力主義の社会で、手帳が雇用の鍵となり、手帳を所持する障害者はピラミッドで最底辺に位置すると感じています。資本主義の中で進むインクルージョンは、健常者の資金で成り立っています。そこでご意見を伺いたいです。

A1. 崔さん「障害者雇用促進法も差別してはいけないという規定があります。障害者の雇用は、手帳の有無が重要視されていますが、これから変えていかないといけません。資本主義の中でも守るべきは権利と人権です。生きる権利は全ての人に共通しています。働こうが働けまいが関係ありません。生きていけばいいのです。健常者の中で働くのは非常に大変なことだと思います。能力主義と言うことで諦めず、今の社会の中で、もがくかでは無くて、他にないかな？と。やってみないとわからないこともあるかもしれません。能力主義は重いことだけれど、人権と権利で守ってと、伝えたいです。」

Q2. 補聴援助システムをつけると、どうして聞き取れるようになるんですか？

A2. 添田さん「補聴援助システムにはマイクと受信機があり、教室の場合だと先生がマイクをつけると、耳にかけている受信機に直接声が入るようになっています。」

3. 実際に行って感じたこと

今まで語られてこなかった気づかれにくい制度のはざまの子ども達を通して、すべての人には、人権と権利があることが浮かび上がったように思いました。学校生活において、子どもへの配慮が無い状況は、子どもの成長に悪影響を及ぼす可能性があり、社会全体で取り組まれないといけないのではないかと感じます。一人ひとりが条約や、法律をきちんと理解し、行政や教育機関等は、率先して勉強し実践すると共に、社会に対して普及啓発が必要だと感じました。

今回、「制度のはざまの子どもたち」に分類した表現にはなりましたが、あらゆる人々が楽に生きていける共生社会を目指し、親御さん自身の安全を確保するためにも連携した取り組みが広がることの大切さを感じました。

参加者の声（アンケート結果などから）

- ・全て人権に通じる、ということがよくわかりました。福祉も教育も就労も、あらゆることを人権というフィルターをとおして考える重要性を認識することができました。
- ・学校は子どもの権利を保障するもので、でも親として子どもの人権をうばっているか、日々確認していきたいです。

企画・運営

村下 初海（コーダえん）【主担当・報告書】

鹿住 貴之（認定NPO法人JUON NETWORK）【副担当】

No.3 ボランティア活動で越境学習を実感しよう

開催目的

越境学習とは、いわゆる“ホーム”と“アウェイ”の境界を行き来することによって学びを得ることをいいます。越境を繰り返すことにより、ホームである組織の価値観と自身の価値観との違いを認識することができるようになり、そして自分らしさを見つけることにつながるといわれています。

実際、既に多くの方々がボランティア活動を通して、越境学習の効果を得ているのではないかと考え、この分科会を企画しました。

『越境学習入門』（日本能率協会マネジメントセンター）の共著者である、法政大学大学院政策創造研究科の石山恒貴教授に越境学習についてご講演いただき、その後、参加者同士が自身のボランティア参加経験を振り返り、対面で共有することで越境学習への理解を深めることを期待し開催しました。



開催日時

2月9日（金）19：00～21：00

参加者数

20名（参加者14名、出演者1名、スタッフ5名）

出演者

石山 恒貴さん（法政大学大学院 政策創造研究科 教授）

内容・成果・課題

1. 講演：ボランティア活動で越境学習を実感しよう

以下に記載の内容に沿って、石山 恒貴さんによる講演が行われました。

（1）なぜ今、越境学習なのか

人は誰でも、固定観念に囚われる可能性がある。しかし、人は誰でも固定観念を打破することができ、いつもと異なる環境に身を置き、葛藤することにより、固定観念を打破する学びは楽しいのではないだろうか。このような問いかけから越境学習についての理解を深め、経済産業省 令和元年度「大企業人材等新規事業創造支援事業費補助金（中小企業新事業創出促進対策事業）」ルーブリックの活用マニュアルを参考に越境学習を通じた学びについて整理しました。



（2）社会課題とボランティアに関する越境学習の事例

本分科会の本題である、ボランティア活動と越境学習について、事例を参考にさらに理解を深めていきました。海外への越境の事例をはじめ、ワーケーションやコワーキングスペースにおける越境学習の事例紹介（川崎プロボノ部 Yさんの事例／はちおうじ志民塾／チガラボ）が行われました。

（3）まとめ

ボランティア活動の場や職場など、私たちはさまざまな組織に身を置いています。そして、その状況に応じて立場や役割を自ずと使い分けており、既に多くの方が越境学習を体験しているといえます。意識的に越境学習に取り組み、様々な状況を得ることで個性や能力をより豊かに発揮するこ

とができるのではないのでしょうか。

2. グループ討議

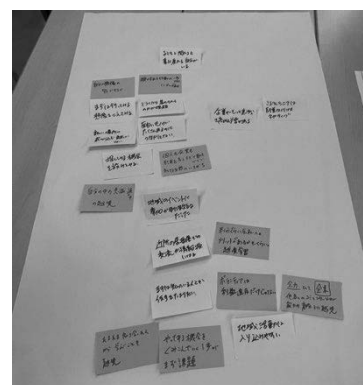
- ・個人として、ボランティアを越境学習に結びつけるための課題はなにか
- ・企業などの組織における、ボランティアを越境学習に結びつけるための課題はなにか
- ・上記を解決する具体的施策はどのようなものか

講演内容により越境学習の理解を深めた後、以上のポイントを踏まえ、3・4名ずつのグループに分かれ、グループ討議を行いました。参加者それぞれが付箋紙に書き出し、グループごとに共有し、それを取りまとめた上で、最後に全体で結果の共有を行いました。グループごとに参加者の皆さんのボランティア活動への関わり方が反映された発表結果となりました。



【成果】

越境学習という考えは、実際にボランティア活動に参加している方からは、学びという観点を意識してボランティアを捉え直すことができ、ボランティアマネジメントの立場からは、新たなボランティア参加者を集める際にも訴求できるポイントであるということが参加者の意見から整理することができました。また、ボランティア活動を通して、参加者同士が相互に越境学習を体感しているのだという気づきから、ボランティア活動に対してより前向きに捉え直すことができるといった意見も寄せられました。



【課題】

“ホーム”と“アウェイ”の境界を行き来する越境学習は、時としてストレスに感じることがあるかもしれません。しかし、何か新しい環境に思い切って飛び込んでみることで、本来自分が大事にしていることや自分が得意とすることが明確になるかもしれません。ボランティアの経験のない方はもちろん、既に長年ボランティアに取り組んでいる方も、様々なボランティア活動に取り組んでも良いのではないのでしょうか。万が一、自分に合わないなと感じたら他のボランティア活動を探す。そんな柔軟さを自他ともに認めることも大事な課題だといえます。

参加者の声（アンケート結果などから）

- ・越境学習というワード自体が新鮮で、問いにあったボランティアを越境学習に結びつける課題以前に、越境学習という言葉自体がボランティアを加速させるきっかけになり得るのではないかとさえ感じた。
- ・数多くのボランティア活動に触れる中で越境学習という観点から見る習慣付けを試みたいと思います。
- ・色々な事例を知れたのと、学ぶということを意識したいと思いました。仲間集めにも、学ぶという側面も伝えたいと思いました。

企画・運営

田中 祥子（デロイト トーマツ グループ）【主担当・報告書】

高橋 義博（府中市市民活動センタープラッツ/Tripod）【副担当】

No.4 子ども・若者ケアラー（ヤングケアラー）支援を考える ～支援のあり方、支援の進め方、当事者の経験も踏まえて～

開催目的

「ヤングケアラー」という言葉を耳にする機会が増えてきました。支援団体、ケアラーだった当事者の方からお話を伺い、現状を正しく理解し、市民活動としての支援のカタチを共に考える機会とすることを目的としました。

開催日時

2月10日（土）9：30～12：00

参加者数

32名（参加者21名：うち会場9名、オンライン12名、出演者3名、スタッフ7名、ボランティア1名）

出演者

阿久津 美栄子さん（NPO 法人 UPTREE 代表理事）

やぶ うちゅうさん（NPO 法人 UPTREE ジュニア部ヤングケアラーOG）

横森 幸子さん（東京都子供政策連携室 課長）

内容・成果・課題

1. 内容・成果

（1）ヤングケアラー体験（やぶさん）

ご自身の育ってきた環境を、具体的にお話ししていただきました。ヤングケアラーという認識はないままに、家事が苦手な母の役割を担い、兄弟の面倒や家事をされていました。父は母へ暴力や大声を上げることが度々あり、児童養護施設に一時保護され、その時に初めて母が知的障がい（知的レベル60以下、小学低学年程度）ということがわかったそうです。親が慢性的な疾患や、目に見えない疾患をもつ家庭は多いではないかと、やぶさんは懸念されています。やぶさん自身の人生を振り返ると「母の人生のフォロー」だったという表現が印象的でした。子どもに困ったことは、時間の概念がないため、学校を遅刻することや、持ち物や弁当が持っていけなかったことで、不登校になってしまったと話されていました。父親の暴力もあったけれど、親が笑っていられるように子どもとして振舞っていたそうです。他の家庭を知らない、そして帰る場所は家しかないと思いながら過ごされ、父親からの障がい者虐待を目の前で目撃しながら、子どもの時を過ごしたと振り返っています。

（2）ヤングケアラー支援を考える（阿久津さん・やぶさん）

親が支援を望まない＝子どもは隠すケースが多くあるため、当事者支援を組み立てていく必要があると話されています。ヤングケアラー支援は、専門家がニーズを把握するフェーズに現状入っています。自治体単位で大きな枠組みは作られ始めていますが、支援する対象がいらないという現状があり、その理由は当事者が声を上げられないためです。ヤングケアラーは虐待を受けていることも多く、虐待の種類もさまざまです。特に経済的虐待を受けたケースは、子どもの時に経験することが、経験できないことが多いです。両親がいて、家があれば問題ないと判断されやすいですが、こういった思い込みを捨て、その家庭や子どもを見なければいけないと阿久津さんは話されています。また、性的虐待は多くありますが、声を上げられないのが現状です。外部の支援者が家庭に入ることは、大きな意味があり、役割があります。元ヤングケアラーは成長過程の中で反抗期がなかったと話される方が多く、感情が表現できないという特徴があります。さらに、親とは共依存の関係になっているケースも少なくなく、家庭から出た瞬間に人としての人生が始まり、「社会に放り出された」「ゼロベース」になったとやぶさんは振り返っています。やぶさ

んは児童相談所の医師に「ここまで頑張ったからもう（お世話を）やらなくていいよ」といわれたことがきっかけになり、ここから自分の人生を生きていいと自立が始まったと話されています。ヤングケアラーは葛藤の中で、支援者や家庭以外の大人が介入することがきっかけになって動き出した瞬間であると感じました。

やぶさんは、中学生の時に父親の暴力がきっかけで警察に保護された時に「母親は理解できない」ことを理由に、中学生のやぶさんに父親を暴力行為で訴えるかどうかの決断を迫られたそうです。その後の生活や暴力の脅威から父親を訴えることはできず、自宅に帰ることを決めました。警察の制度の中での対応は間違っていないかもしれませんが、ただ、家族の中で解決を求める支援者が多く存在し、これがヤングケアラーを生んでいると阿久津さんは懸念されています。ヤングケアラーは「助けて」は言えません。支援者は寄り添うことが必要であり、家族全員個別の支援が必要と話されています。具体的な支援としては、子どもへは挨拶を継続する（当たり前の日常をつくる）・子ども中心に支援を考える（自己肯定感がないため、自己肯定感を高める声掛け）・具体的な支援の声掛け（当たり前をしらないため「何かあったら」の何かがわからない）を挙げられていました。ヤングケアラーは介護経験の一部の時間であって、回復期にあるヤングケアラーは自律（自ら判断・行動・価値観信念ができること）しようとしています。親と自分の人生に線引きをすることで、無意識な親子の共依存から絶つことが必要です。ケアラーとしての時間は永遠に続いています。支援のあり方は支援者ができることや関わりを考えればよいと阿久津さんからご提案頂きました。

（３）横森 幸子さん（東京都子供政策連携室）

東京都の施策としてヤングケアラー支援ホームページを制作し、ヤングケアラーを考える人たちが誰でも集える場所でありたいことをコンセプトにされています。また、イラストでヤングケアラーの状態を説明されており、１つに意見をまとめるのではなく、それぞれを紹介することを目的としています。多くの都民がヤングケアラーに興味関心を持ち、また、ケアラー自身もどんな事業が行われているのか、わかりやすい内容となっていることがよいと感じられました。

２．課題

ヤングケアラーが声を上げられない背景には多くの社会課題が絡み合っています。また、性的、経済的虐待など見えない虐待が多く存在しています。子どもの権利を守るとは、社会課題として取り組みが始まっていますが、日本は親権が優位となるため、日本の社会問題として、虐待や子どもの権利も含めて取り組んでいく必要があると感じました。



参加者の声（アンケート結果などから）

- ・大変貴重なリアルな実態の一面をお話いただきありがとうございました。課題を理解するうえで本当に貴重な機会になりました。
- ・頭と知識でしか知らなかったヤングケアラーのこと、私たちに何ができるのかどんな支援が必要かと、リアルに感じる事が出来て貴重な時間でした。

企画・運営

佐藤 純（NPO 法人 Hand Over Japan (HOT)）【主担当・報告書】

神元 幸津江（NPO 法人全国災害ボランティア支援団体ネットワーク(JVOAD)）【副担当】

No.5 Ally（アライ）として何ができる？ ーLGBTQ フレンドリーなコミュニティづくりを考えるー

開催目的

性の多様性への理解は少しずつ広がりつつありますが、LGBTQ 当事者が安心して過ごせる社会の実現にはまだ遠いように思います。そこで、性の多様性を理解し、支持する立場である Ally（アライ）として、当事者や私たち自身がともに気持ちよく活動できるコミュニティをつくるためにできることは何か、実際に当事者と Ally が共に過ごし、活動する場づくりに取り組んでいる中島潤さんの話をヒントに、一人一人が生活のなかで、活動のなかでできることを考えました。

開催日時

2月10日（土）9：30～12：00

参加者数

17名（参加者10名、出演者1名、スタッフ4名、ボランティア2名）

出演者

中島 潤さん（多様な性と人権の発信者／NPO 法人 LGBT の家族と友人をつなぐ会メンバー）

内容・成果・課題

1. 中島さんのお話

LGBTQ フレンドリーってどんなことでしょう、子どもから「LGBTQ ってなあに？」と聞かれたら何と答えますか、といった問いかけから話は始まりました。そして、LGBTQ の用語の理解をすることも間違っていないけれども、LGBTQ はそもそも人権の尊重に関するテーマであって、人は人権が尊重されているとともに、人には性の人権がある、人権という視点から LGBTQ を捉えていくことが大切であるとお話いただきました。

さらには、「私はレズビアン、私はヘテロセクシャル」と自然に、かつ対等に、自分の性について語ることができる社会になれば、あえて LGBTQ と性的少数者をカテゴライズした単語は必要なくなる、みんなが安心して過ごすことができるといった、LGBTQ という単語がこの社会で存在し続けていること自体が課題であることにも触れられました。

後半は、Ally だからできることとして、すべての人の性の人権を尊重する SOGIE インクルーシブな環境づくりが大切という視点を教えていただきました。具体的には、「今、LGBTQ の人がいない前提で話が進んでいない？」「この性別欄いらなくない？」「それってセンスいいかな？」といった声掛けなど、SOGIE インクルーシブな社会づくりに向けて、Ally として明日からできる取り組みについて紹介いただきました。



2. グランドルールの確認

中島さんからもお話の冒頭で、「みんなが安心して過ごせる場をつくる」「話す、話さない自由」「休憩、出入り、自由」といったこの場のやくそくとしてグラドルールが伝えられましたが、グループワークに入る前に、中島さんの話に加えて、あらためて参加者、中島さんとともに、

「何を言ってもOK」「言いたくないことは言わなくてOK」「言葉や文章にならなくてもOK」「お互いの意見を尊重する（人の発言について否定・批判はしない）」「自分の考えや意見の変化を恐れず、受け入れる」「人の話を聞いて、アイデアの付け足し歓迎」「わからないときは質問大歓迎！」といったグランドルールの確認を行いました。



3. グループワーク

Ally として生活のなかで、活動のなかで、①工夫できること、②行動するにあたってもっと知りたいこと、考えたいこと、についてグループに分かれて話し合いました。

Ally として	工夫できること	行動するにあたってもっと知りたいこと、考えたいこと
生活のなかで	・〇〇はこう！▲▲はこう！と思い込んでの発言は控える ・自分の発言に含まれる差別や偏見に気づけるといい ・「ふつう」という言葉を使わない ・LGBTQ 関連の条例を調べる	・LGBT はなぜ虹の色？ ・相手のことを傷つけないように気にしすぎてそわそわしないようにするには？
活動のなかで	・“さん” 呼びの統一 ・困りごとを共有できる場づくり ・「SOGIE インクルーシブにしようよ」という言葉を紹介する ・実はあまり意味のない性別のくくりを問う（学校に）	・LGBTQ の困りごとをもっと詳しく知る ・人の発言を否定しないことと、それってセンスないよね、この両立むずかしそう、どうしたらいい？

参加者のポストイットより一部抜粋

4. 成果と課題

中島さんから人権課題としてLGBTQを捉えるという視点を提供いただいたことや、具体的な声掛け例や、参加者による「工夫できること」のシェアはSOGIE インクルーシブな社会づくりに向けた明日からの行動を後押しするものとなりました。しかし、一人ひとりの性や、その性の多様性について理解し、包摂的な社会をつくるための視点や行動は社会のなかでまだまだ不足しています。今後も、多様な市民が集まるこのような場で対話の機会を持ち続けていくことが必要だと感じます。

参加者の声（アンケート結果などから）

- ・自分が普段感じている違和感や「これでいいんだろうか？（自分に対して）」をシェアすることができ、また色んな方の言葉を聞けて、考え続けることをまた決意できました。
- ・「それってセンスいい？」「SOGIE インクルーシブにしようよ」と言ってみるといいなと思いました。他にも知らない情報や考え方を教えていただけたし、参加してよかったです。グループワークでいろいろな人の思いを知る事が出来たこと。多様なのに意見をいい合えたことがうれしかった。

企画・運営

芦澤 弘子（聖学院大学ボランティア活動支援センター）【主担当・報告書】

村下 初海（コーダえん）【副担当】

No.6 若者の政治参加を考える

開催目的

社会をよりよいものにするには、草の根の活動だけでなく、制度をつくる政治に影響を与えることも重要です。しかし未来の社会を担う若者世代において、選挙の投票率や政治への関心の低下が示されています。なぜ若者世代の関心が低いのか、投票率や関心の向上をどう図れるのか、様々な取り組みから若者世代の政治参加（今回は特に選挙に絞って）について考えました。

開催日時

2月10日（土）9：30～12：00

参加者数

23名（参加者14名：うち会場10名、オンライン4名 出演者4名、スタッフ3名、ボランティア2名）

出演者

林 大介さん（浦和大学社会学部 准教授／模擬選挙推進ネットワーク 代表）

上田 咲希乃さん（民主主義ユースフェスティバル 実行委員）

鈴木 弘樹さん（国分寺の投票率を1位にプロジェクト 発起人）

内容・成果・課題

1. 政治についてのイメージ

まず、参加者のみなさんから政治についてのイメージを伺いました。「自分から遠い」「分断」「もめて話す」「生きること」「リーダー」「思想」「お金がかかりそう」「話すことがタブー」「国民の生活を考えていない」などさまざまなイメージが出されました。

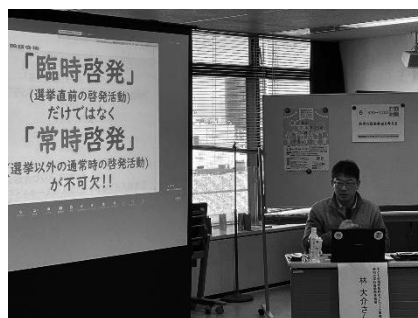


2. 林さんの基調講演

次に、林さんから「若者と政治」についてお話をいただきました。

子どもであっても主権者であり、主権者としての意識を子どもの頃から学ぶこと、一人の人間として尊重されることが重要です。

選挙の投票率が低いと言われますが、選挙直前に啓発するだけでは上がりません。むしろ選挙以外の通常時での啓発が重要で、それには身近で政治について話し合ったりする機会が必要です。若者世代の投票率が60歳代と同じ72%になると一選挙区あたり5.5万票増えます。これだけ増えると選挙結果が変わります。これからの社会について、若い人たちの意思表示が通らなくなることには懸念があります。投票に行かない理由として、投票したい候補者・政党がない、政治や選挙に興味がない、投票しても変わらない、ということがありました。政治や選挙が身近なものと感じる機会がないのではと感じています。



リングを描く際、まったく同じものを描く人はいません。このように、抽象的であればあるほど捉え方が様々で、政治や民主主義なども同様です。多様性があって、いろいろな捉え方があるのでわかりにくさがある。それを認め合うのが大事なのですが、今の日本社会でどれだけ認め合うことができていくのかは気になることです。違いを恐れるのではなくて許容し楽しみ合う方が楽なはずですが、ルールを守ることは大事ですが、変えることができるということも重要です。自分たちが多くの時間を過ごしている学校のルールなど、身近なルールを変える経験がないと国のルールが変わることの意義は理解しづらいでしょう。まずは自分ごとに引き付けることから始めないといけないのではと思います。

3. 事例報告

続けて、上田さんと鈴木さんから、それぞれの取り組み事例についてお話をいただきました。

(1) 民主主義ユースフェスティバル

これは、社会問題についてみんなで話し合ったり、政治家と若者が気軽に対話できる機会を設けようというイベントです。北欧での「選挙小屋」をモデルに2023年3月に開催、全主要政党が参加してテントで来場者と対話する機会を設けたほか、パネルディスカッションや音楽ライブ、キッチンカーなどもありました。大雨ながら3000人超の来場があり、下北沢駅近くで開催したのでふらっと立ち寄った人が多かったようです。楽しみながら話せたという人のほか、このイベントを機に政治家の選挙ボランティアをした人もいました。課題は、対話ブースを設けても何を話してよいか躊躇する人がいたことや、行政・教育委員会・企業の協力が得づらかったことなどが挙げられます。まだまだ日本社会に政治や民主主義という言葉が浸透してないのかなと思います。



(2) 国分寺の投票率を1位にプロジェクト

自分が参加した政治について気軽に話す会が面白くて、これを広めようと活動を始めました。最初は街中で屋台を引いたり、SNSで発信するところから始めて徐々にアップデート、屋台を増やしたマルシェ・候補者インタビュー・ラジオでの発信・ガイド演説ツアーなど活動を広げました。選挙に行かない人の理由の一位が選挙に関心がない、人物像がよくわからないということもあり、選挙の論点や意義、候補者の政策の違いなどがわかるよう、駄菓子や野菜で模擬選挙を行ったり、一般質問データベースを作ったりもしました。成果としては1.5%アップ、特に若者の投票率が4%アップし、自分たちの発信が届いたのかと感じています。一方で、これだけやっても1.5%しか上がらないなど、この状況をひっくり返すのは並大抵ではないと改めて感じています。



4. 質疑応答

その後、会場からコメントをいただきながら、登壇者との質疑応答・意見交換を行いました。政治について話せる仲間を見つけない、今まで受け身だったことに気づき希望を持てるようになった、選挙の時だけではなく日常から自分ごとにしていくことが非常に大事、などのコメントがありました。

5. 成果と課題

参加者の感想から、選挙や政治を考えるきっかけになったのはよかったと思う一方で、実際に身近なところで政治を語ることはやはり難しいなと感じます。失敗・違い・衝突を恐れる日本社会の雰囲気はどう変えていけるかがこれからの課題です。地道に、しかしあきらめてはいけなかったと思います。

参加者の声（アンケート結果などから）

- ・2つのフレーズが心に残りました。負のエネルギーではなく共感エネルギーを大事にする。政治家を人間だと思っていない、サンドバッグ状態。若者の政治参加に必要なのは「楽しむ」ことだと思いました。一人一人わたしたちがじんわりと話し合っていくことが大切のように思いました。
- ・登壇者の皆様による講義、活動紹介が興味深かったです。政治の話題となると、どうしてもネガティブな気持ちになりがちですが、ポジティブに考えることができるように前向きに取り組みたいです。

企画・運営

市川 徹（株）世田谷社/一般財団法人世田谷コミュニティ財団）【主担当・報告書】
渡部 芽生（東京ボランティア・市民活動センター）
高橋 義博（府中市市民活動センター プラッツ/Tripod）

No.7 「日本を再び戦場としないために」 ～市民のできることを考える～

開催目的

ロシア・ウクライナやイスラエルのパレスチナ自治区などでは実際に戦争が起き、台湾有事に備えるなどという理由で日本でも戦争に巻き込まれることを想定した法制化などが進んでいます。第二次世界大戦以降、その教訓から戦争を放棄し約80年間近く平和を維持してきた日本のこれからの平和の継続に向けて市民が取り組むべきことはなんなのか？

沖縄での基地建設や軍備増強に反対する市民の活動状況などを知り、今後私たちが平和実現のために果たすべき役割を考えたいと思います。

開催日時

2月10日（土）13:30～15:30

参加者数

14名（参加者6名：うち会場2名、オンライン4名 出演者1名、スタッフ6名、ボランティア1名）

出演者

谷山博史さん（日本国際ボランティアセンター前代表理事・現顧問）

＜「台湾有事」を起こさせない沖縄対話プロジェクト呼掛人・実行委員＞

内容

1.（内容）谷山さんのお話

1）今という時代 アメリカの2010年代以降の安全保障戦略が対テロから対中国戦略へと変化していくことにつれて日本も政府の対応が東西問題へとシフトしてきています。アメリカはアフガニスタンから撤退できずに泥沼化していましたが、大統領がトランプに代わりタリバーンとの交渉が実現して戦場から撤退し、対中国への厳しい政策的対応へと進むことになりました。イギリスから返還された香港への中国の強権的対応などもあり、台湾と中国の関係を危険視する外交課題が頻繁に訴えられるようになって、北朝鮮の核配備やミサイル発射などの経緯も含めて日本国内でも軍備増強を求める政治家の発言などが注目されるようになってきました。

2）沖縄から見える戦争に向かう動き 安保法制から安保三文書による軍拡、社会・経済の軍事化へと政策が方向づけられていると感じます。敵基地攻撃能力の保有が認められ、敵基地を攻撃するための中距離、長距離の攻撃型ミサイルが導入され、沖縄や奄美諸島でのミサイル基地建設が進められようとしています。与那国島や石垣島、宮古島などの国境離島では有事における住民避難を口実として港湾や空港の軍事利用を前提とした機能強化などが自治体側と合意を取り付ける、または自治体側からの要請という形で進められています。



3) 再び戦争を起こさせないために私たちに何ができるか(対話の重要性) 戦争は「作られる」という視座をもち、戦争に向かう社会は洗脳と分断によって作られていくという理解する必要があります。「土地規制法」によって極めて曖昧な「重要施設」(軍事施設や港湾、空港など)を中心に住民による監視や反対運動などを抑え、告発を奨励するなど分断しようとする作を見ることができます。「台湾有事」という言葉に惑わされることなく、軍備増強以前に危機感を持つ当事者間による対話を進めることが重要だと考えます。沖縄の歴史は台湾を戦場にしないために大きな意味を持ち、ひいては日本を戦場にしないという目標につながります。沖縄では台湾や中国の市民と対話する機会を持ち続けていますが、日本全体が沖縄を他人事と考えずに戦争を起こさせないための意志を持ち、様々な対話を進めていくことが重要だと考えます。



2. (成果)

1) 辺野古の米軍基地建設に対する反対運動などを時々ニュースなどで見ることはあるが、沖縄が日常的に戦争に向けた準備が進められていることの現実を知ることができました。また、沖縄では多くの市民が戦争を起こさないために活動を展開しているながら、政府の方針を受け入れようとする人々との分断も起きていることを知り、危機感を持つことができました。

2) 沖縄で起きていることは日本全体で共有すべきことで、マスコミからの情報だけではなく、平和を目指す市民一人ひとりが意識していくことが必要だと感じました。

3. (課題)

参加者が少なかったのはタイトルに「戦場」などという過激な言葉を題したことが一つの原因ではなかったかという意見があり、ストレートに訴えるよりもソフトに表現することによって多くの人々の関心を誘引することができるのではないかと思います。

参加者の声(アンケート結果などから)

- ・タイトル通り、日本が戦争に加わらないために自分に何ができるのかを知りたいと考えて参加しました。私にできることは何かは明確には分かりませんでしたが、沖縄の様子は分かりました。
- ・ここ最近の日本がまとう空気感になんとなく危機感を抱いていましたが、今日でその要因が分かった気がします。今日学んだ知識は、全く知らないことも多く「作られた脅威」に私も飲み込まれていた部分があったなと少し怖くなりました。と同時に、正しい学びを得て向き合うことの大切さを改めて実感しました。学ぶことは労力がかかりますが、それでもその努力をやめない人でありたいと思います。
- ・知らないことが多く、同じ日本人として意識しなくてはいけないことがわかりました。現地の人の苦労や努力がよく分かりました。

企画・運営

枝見 太朗(社会福祉法人東京都共同募金会)【主担当・報告書】

秋元 美帆(中央大学文学部)

犬塚 尚樹(NPO 法人ふれあいの家 おばちゃんち)

高山 和久(東京ボランティア・市民活動センター)【副担当】

伏見 明(東京都教育庁/自由な美術活動空間)

No.8 タブーにしない！虐待について話して知ろう

開催目的

「児童虐待」については、まだまだオープンに話せない雰囲気があります。虐待サバイバーと言われる、子ども時代に虐待を受けた方の体験を伝えてもらうことで、虐待の実態を知ってもらいたいと思います。また、どこまでが虐待なのか、虐待が子どもに与える心理的な影響についてもお話を伺います。

虐待には様々な社会的要因がありますが、虐待問題への理解を深め、不安を抱えている子どもたちが、誰かに相談しやすくなる社会環境を作る一歩につなげていきたいと思い、企画しました。

開催日時

2月10日（土）13：30～15：30

参加者数

23名（参加者14名、出演者3名、スタッフ4名、ボランティア2名）

出演者

INOKEN さん（siwo 虐待サバイバーBANK 代表）

風間 菜凧さん（全盲ヘルスキーパー）

石田 ゆかりさん（高島平ウィメンズヘルス研究所 代表／地域交流広場ぱうぜ運営（株式会社アップル・プレス 代表取締役））

内容・成果・課題

1. 石田さんからの話題提供

冒頭、石田さんの方から「児童」の定義として、18歳未満の者であること、児童虐待の防止等に関する法律や「児童」に関する各種法令などの紹介があり、児童虐待の定義が示されました。

【児童虐待の定義：4種類】

- ・身体的虐待・・・殴る、蹴る、叩く、投げ落とす、激しく揺さぶる、やけどを負わせる、溺れさせる、首を絞める、縄などにより一室に拘束するなど
- ・性的虐待・・・子どもへの性的行為、性的行為を見せる、性器を触る又は触らせる、ポルノグラフィの被写体にするなど
- ・ネグレクト・・・家に閉じ込める、食事を与えない、ひどく不潔にする、自動車の中に放置する、重い病気になっても病院に連れて行かないなど
- ・心理的虐待・・・言葉による脅し、無視、きょうだい間での差別的扱い、子どもの目の前で家族に対して暴力をふるう、きょうだいに虐待行為を行うなど

2. 風間さんからの体験談

虐待サバイバーとして、風間さんからご自身の体験を伺いましたが、それは想像を絶するものでした。男女の双子として、未熟児で生まれ、4、5歳の時に児童養護施設に入所したこともあったようですが、6歳くらいから風間さんにだけ母親からの虐待が始まりました。

母親は地域でも信頼され、立派な人と思われているような方でした。初めは他の家族の前での暴力行為はなく、寝させてもらえない、寝るために条件をつけられる、下着で立たされるなどの行為でしたが、



徐々にエスカレートし、水に沈められたり性的虐待にも及んでいったそうです。最初は、自分が言うことを聞いていれば収まると思っていましたが、怪我をさせられた際の母親の隠蔽工作や自分自身を見てもらったことが1度もなかったことにとっても傷ついたといいます。

小学生の時、入院先の看護師に、初めて「家に帰りたくない」と勇気を出して助けを求めたそうですが、その時は笑われて終わってしまったそうです。勇気を出したSOSをどう受け止めていけるのか、とても考えさせられました。

家を逃げ出しても連れ戻され、逃げることもあきらめた時に、元々見えにくかった目を殴られたことで失明に至りました。そんな辛い生活が続く中、高校の時に自殺を図る際に、無意識に担任に電話をしたことがきっかけで、児童相談所に連絡が行き、警察に保護されました。そんな状況の時でも家に帰るかを聞かれ、愕然としたという言葉が印象的でした。高校生だったから、「帰らない」と答えられたが、子どもだったら、その言葉を言えたのか分からない、と。

3. INOKEN さんからの活動紹介と活動に至る背景

虐待のない社会を目指して、虐待に関する理解を深めたいとの想いで虐待サバイバーBANK を立ち上げました。ご自身も子ども時代に虐待をうけたサバイバーです。

軟禁状態となり、食事も食べられなかったことから栄養不足となり、入退院を繰り返し、一時は車いすで生活していたこともあったそうです。家を出て、ストリートチルドレンとして草を食べて飢えをしのいだ時期もありましたが、周囲で気づく大人はいなかったと言います。



厚生労働省が出している虐待の報告よりも、実際には、もっと多くの子どもたちが虐待を受けていると思われます。児童相談所などもありますが、通告があってから48時間様子を見るのでは遅い場合もあり、一時保護も最大2カ月では短い場合もあります。子ども時代に虐待を受けた方の9割が自殺を考えたことがあり、うち6割が実行したことがあるという調査結果もあるそうです。また、子どもたちのほとんどが助けを求めたことがないと言います。実際に親戚や先生など、近しい大人に助けを求めた場合、状況が悪化または何も変わらなかったという声も多いそうです。そのような虐待の実態をもっと多くの人に知って欲しい、そうした思いで虐待の体験を話していただける方に場の提供をする活動をしています。

4. まとめ

ご自身の経験を語ることはとてもつらく、大変なことだと思います。それでも、その勇気ある発信が、見て見ぬふりをする社会の状況を変え、子ども達のSOSをキャッチできる人が増えることにつながるのではないかと思います。虐待を受けている状態にある子どもたちは思考が停止していると言います。とにかく本人の話を聞く。その際には「大丈夫？」とは聞かないで欲しい。なぜなら、「大丈夫」としか答えられないから。この風間さんの言葉をしっかり受け止めたいと思います。

また、子どもは保護されて終わりではありません。虐待による後遺症や精神疾患、トラウマなど、その後の人生への影響も大きく、新たな戦いの始まりでしかないのかもしれませんが。このように苦しい思いをしている虐待サバイバーの方が勇気を出して語った声を、理解は出来なくても、拒絶することなく、しっかり受け止めていきたいと思います。

参加者の声（アンケート結果などから）

- ・虐待を知っているつもりでいたが、体験談をリアルに聞いてショックを受けた自分に、「わかってなかった」ことを知りました。今日の学びをもっともっと理解し受けとめていきたいと思います。
- ・当事者がどのような経験をうけてきたのかを知るだけでも、できることは多くなるだろうし、どのような思いで助けを求めているのかが分かり、周りの人との関わりでも大切にしたいと思いました。

企画・運営

神元 幸津江（NPO 法人全国災害ボランティア支援団体ネットワーク(JVOAD)）【主担当・報告書】
佐藤 純（NPO 法人 Hand Over Japan (HOT)）【副担当】

No.9 居場所づくりの中で「災害」を考えませんか？ ～普段のつながりづくりからできること～

開催目的

私たちの身近な地域には、多様な場所、分野の「居場所」があります。ボランティア・市民活動団体における居場所づくりは、「災害」時における大きな支えあいの力になるということは、あまり知られていません。平時からの居場所づくりが、なぜ「災害」時の支えあいにつながるのかを話し合い、居場所づくりにおける「災害ボランティア」について、私たちにできることを考えました。

開催日時

2月10日（土）13:30～15:30

参加者数

55名（参加者39名 うち会場22名、オンライン17名 出演者4名、スタッフ8名、ボランティア4名）

出演者

金剛地 彩子さん（東長寺こども食堂 代表）

濱田 勝江さん（中野区鷺宮地区民生児童委員協議会 副会長）

東谷 知佐子さん（NPO 法人 HATI JAPAN 多文化多言語の子ども発達支援 代表理事）

加納 佑一さん（東京ボランティア・市民活動センター 主任）【進行役】

内容・成果・課題

1. 内容

（1）加納さんからのお話

加納さんからはこの分科会の開催を通し、伝えたい視点を話されました。

一つ目は「災害は平時の取り組みが重要」であること。二つ目は「多様な団体・個人とのつながり」が災害時に活かせることです。その中でも「居場所」と「災害」がどのように関係するのか、東京ではどのような取り組みがあるのか、二つの視点を踏まえて考えたいとのことでした。

①これまでの被災地での居場所づくり

平成27年北関東豪雨（茨城県常総市）、平成30年7月豪雨（愛媛県宇和島市）、令和元年東日本台風（福島県いわき市）における居場所活動や「ふれあい・いきいきサロン」についての事例報告がありました。災害時に「ふれあい・いきいきサロン」等のような「居場所」が無くなると、住民同士の交流、顔を合わせる機会が無くなり、住民の孤立、ひきこもりや運動機能低下による心身のフレイル化が進むことにつながります。このような居場所があることで、地域コミュニティの再生から、災害からの復旧・復興における大きな力になるということをご報告いただきました。

②東京都内での取り組み

東京ボランティア・市民活動センター、東京都、災害協働サポート東京（CS-Tokyo）が中心となり、「アクションプラン」の推進を進めています。災害に備え多様なボランティア・市民活動団体が、平時から連携・協働して取り組むこと、平時からの顔が見える関係性をつくることは、居場所づくりにおいて考えていただきたい視点としてご報告いただきました。

（2）パネラーからの事例報告

①東長寺こども食堂の取り組み報告（金剛地さん）

東長寺は、新宿区四谷にて地域の方の心の拠り所、地域に根差し、時代に沿った活動をされています。こども食堂夏休みイベントとして行なった「なつやすみ こども防災まちあるき」は、こども達が東長寺周辺地域の防災倉庫見学、災害時に避難所を運営する町会自治会の方からお話を聞く時間、防災マップづくり、そして、こども食堂の特徴を活かした美味しい防災食をみんなで食べるという企画を報告されました。このイベントの実施にあたっては、地域の町会自治会、ボランティア団体、NPO 団体や社会福祉協議会等との様々な関係機関との協力、協働があって実現することができたと語っていただきました。このようなイベントを行ったことで、こども達自身の学びはもちろんのこと、東長寺こども食堂にとっても、活動を知ってもらったきっかけになったとご報告をいただきました。



また、東長寺が400年続くように、お寺はずっと身近にある場所であり、地域のかけこみ寺として、こども食堂に来てくれる地域の方々にとって、災害時はもちろんのこと、何か困った時に立ち寄れる場所でありたい。今後もこのイベントでつながった様々な関係機関とともに、防災に関する活動や地域に根ざした活動を続けていきたいという思いを語っていただきました。

③中野区鷺宮地域における取り組み報告（濱田さん、東谷さん）

中野区の鷺宮地域は新宿まで通勤が便利なため、新宿で働いている外国の方が便利な場所であること、比較的家賃も落ち着いており、中野区の他の地域より外国の方が多い地域特性があります。一方で中野区の中心部から離れていることから、様々な支援が届きにくい地域とご報告いただきました。

事例で取り上げた中野区にある鷺宮西住宅は、1960年代に完成した団地であり、昔から住む居住者の高齢化、そして外国の方が増えた場所であり、これまで交流やお互いを理解する機会が無かったことで、住民トラブルに発展することもあったそうです。濱田さんが民生児童委員の活動でも感じていたそれらの課題と様々な団体（国際交流協会、警察、中野区、社会福祉協議会等）との思いが一致したことで、「防災」をテーマに、「やさしい日本語」ワークショップや防災訓練等のイベントを行うことができ、外国の方と交流を図るきっかけになったとご報告をいただきました。このようなイベントを行う中で、東谷さんは、外国の方に効果的に伝わる情報や外国の方の文化なども分かったそうです。

そして、東谷さんからは、「やさしい日本語」についてもお話をいただきました。「やさしい日本語」は1995年の阪神淡路大震災を契機にして広まったといわれ、災害時に有効であることが「やさしい日本語」ワークショップから分かったそうです。防災は、国、そして文化によって違うこと、また私たちはよく、外国の方に英語で話さないといけなってしまうが、日本語を優しく伝えること、相手に伝わりやすいような工夫をするだけで、外国の方に伝わるそうです。そして、「平時からの顔の見える関係性をつくること」がやはり大切であるというご報告をいただきました。

（3）質疑応答

地域で居場所づくりに取り組まれている団体より、「防災関係のイベントを行いたいが、代表自身が別の地域に住んでいるため、なかなか協力的な返答をいただけない。町会自治会等との地縁組織との関係性づくりをどうすれば良いか？」と質問をいただきました。

東谷さんより、自身も中野区外に在住されているそうですが、活動する鷺宮地域に長く住む方とともに活動することで、その地域の関係性や特性を理解したこと、そして濱田さんより、町会自治会に何度も声をかけ続けることで、地域の関係者や町会自治会といった方々がその活動について理解し、つながるきっかけになるのでは？と活動のヒントを教えていただきました。

2. 成果と課題

今回の分科会では地域の中で居場所活動をされているボランティア・市民活動団体、中間支援組織を中心に参加がありました。「災害」をテーマに「居場所」、そして「平時からの顔の見える関係性づくり」の大切さを改めて考えることができたと思います。

今後も、災害が起きる前からの地域住民、ボランティア・市民活動団体や町会自治会のような地縁組織がつながりつづけること、そして「災害」について関心を持つことが必要だと感じます。

参加者の声（アンケート結果などから）

- ・地域での普段の活動から、防災について個々の団体がどう取り組めるのか知りたいと思いました。東長寺がお寺という地域に根付いた拠点の特性を最大限活用されていること、中野区鷺宮地域の実状と外国籍の方へのアプローチ、やさしい日本語での伝達と命や暮らしを守るために一緒に活動する工夫など、先進的でありながら「自分にもできるかも」と身近な取り組みで、とても参考になりました。
- ・災害が起こる前だけでなく発生後の復興にも居場所づくりが大切であると分かりました。
- ・地域社会の人間関係の大切さと平時からの取り組みの大切さを実感いたしました。

企画・運営

久保 賢人（社会福祉法人中野区社会福祉協議会 中野ボランティアセンター）【主担当・報告書】

堀尾 麗華（認定NPO法人難民を助ける会（AAR Japan））【副担当】



No.10 共感されるNPOになろう ～企業や行政との協働、助成金の活用～

開催目的

活動を続けていくなかで、人、物、金、情報が必要といわれますが、それは団体の目的や活動の意義に共感されると集まりやすいと考えられています。企業や行政と協働している団体や助成金を活用している団体に、どのような思いで取り組んでいるのか、工夫していること等をお話いただき、自分たちの団体がどのように見られているのか振り返るとともに、一緒に考えることを目的に開催しました。

開催日時

2月10日（土）13:30～15:30

参加者数

32名（参加者21名：うち会場14名、オンライン7名、出演者4名、スタッフ5名、ボランティア2名）

出演者

徳田 五十六さん（大山子ども食堂・みんなの広場 代表）

加藤 亮子さん（芝の家 事務局長）

吉田 圭助さん（公益社団法人シャンティ国際ボランティア会 広報・リレーションズ課 チーフ
リレーションズ担当）

武藤 良太さん（公益財団法人トヨタ財団 国内助成グループ グループリーダー）【コーディネーター役】

内容・成果・課題

1. 登壇者から取組み報告

それぞれの自己紹介の後、活動概要を報告いただきました。

（1）大山子ども食堂・みんなの広場の取組み

徳田さんから、活動立ち上げからこれまでの経緯、助成金の活用についてお話をいただきました。2022年に場所やお金、協力してくれる人の目途がたち、活動が始まりました。1回目の子ども食堂の周知を学校や民生委員、町会などに周知し、20人以上の親子が参加しました。その後毎月2回の開催に増え、参加者は1回あたり50人まで増えています。また、助成金の活用により、農園を運営して親子で収穫体験会を行ったり、クリスマスコンサートを行ったりしました。助成金申請の際には、自分たちの事業の目的と助成金の目的が合うものを探ること、団体の体制やミッションを申請書で明記することを意識しています。今後は、活動を継続していくための組織化や資金づくりを検討していきます。



徳田さん

（2）芝の家の取組み

加藤さんから、多世代交流の常設型居場所運営の工夫と補助金についてお話をいただきました。芝の家は、地域の人と人のあたたかいつながりづくりを目的に、港区から三田の家有限責任組合に委託を受け、スタッフは3人、ボランティア10人程度で運営しています。居場所以外にもイベントの企画等で年間約30～40人が活動しています。予算は港区芝地区総合支所の地域事業費から出ています。拠点を民間から借り上げているため、委託費の約3分の1は家賃に支払っています。その他で広報費、企画運営費、人件費、消耗品費等を賄っています。区役所とは月1回定例ミーティングを行っています。いろんな人がくる居場所だからこそ、スタッフからの声かけや空間の雰囲気や大事にしています。特に、居場所を運営するボランティアスタッフの安心感や自由さ、多様性を受け入れる姿勢を日々持ち続けるために、一人ひとりに寄り添う気持ちや予定外のことを楽しむ気持ちを忘れないよう心がけています。



加藤さん

（3）シャンティ国際ボランティア会・「絵本を届ける運動」の取組み

吉田さんから、シャンティ国際ボランティア会で行っている「絵本を届ける運動」についてお話をいただきました。今年で25周年となるボランティアプログラムで、これまで海外に約40万冊を届けています。寺院や企業、学校など団体からの参加と個人の参加があります。リピーターの方が多くいますが、図書

館に配布しているパンフレットを見て申込みしてくださる方もいます。1セットにつき参加費 3,000 円をいただき、費用を賄っています。絵本の管理や返本、発送作業なども事業に含めているため、運営費としては厳しい部分もあります。なるべく効率化できるように ICT の活用をすすめています。



吉田さん→

2. 登壇者によるトークセッション（一部抜粋）

- ・ボランティアに関わっている人の年代は？

徳田さん：70代が多い。興味をもって見学にくる現役世代はいますが、実際の活動にはつながっていません。

加藤さん：ボランティアも多世代で20代～60代が関わっています。居場所に来た人をスカウトして運営側にまわってもらうことが多いです。



左から武藤さん、徳田さん、加藤さん、吉田さん

- ・事業やプロジェクトの「現実」と「理想」の規模感を教えてください。こんな人に関わってほしい、こんなお金を活用したいなどありますか？

吉田さん：活動地の配布計画に基づいた目標冊数を設定しているため、目標冊数を超過してしまうと申込があってもお断りせざるをえません。一方で参加者に費用負担をお願いするプログラムなので、より幅広い方の参加を促すしくみづくりが今後の課題です。

加藤さん：居場所に歩いてこられる人が訪ねてくる事業のため、最近来ない人に訪ねていきたい気持ちがあります。ただ、訪問するならスタッフの人数上、居場所を閉めることになるジレンマがあります。15年やってきて開所時刻は平日の昼間中心に変えてきた部分もありますが、現役世代の参加を考えると夜や土日の開所を増やしていくと、よりニーズに応えられるのではないかと思います。ただ、予算や人、体力などを考えると現実的には難しい部分も多いです。また、PTA や民生委員にも関わってもらえる場になるといいなと思います。

徳田さん：子どもたちが気軽に来て学習できる場にしたい思いがあります。今後、大学生の関わりができるといいなと思います。学校で宿題を出さない動きもあるため、夏休みの自由研究などで一緒にできる企画づくりをしていきたいです。助成金によっては、対象が法人のみの助成金もあるため、今後 NPO 法人化も検討していきたいです。

3. 参加者同士のグループワーク

理想の活動に向けて、①まずできること、②やらないといけないこと、③できないこと（あえてやらないこと）について「共感」をキーワードに、意見交換しました。

4. まとめ

NPO は限られた資源の中で活動を展開しています。だからこそ、どんな人と一緒に活動していきたいのか、誰に共感してもらいたいのかを考えることが大事です。また、助成金も重要な財源ではありますが、助成金の場合は共感されれば必ず獲得できるというわけではありません。会費や寄付金など、共感や参加に紐づく財源は仲間づくりにもつながるので、しっかりと取り組んでほしいと思います。

参加者の声（アンケート結果などから）

- ・登壇された各団体の活動が、地域や社会に受け入れられている様子を知ることができました。自団体として何を大切に活動するのかをしっかりと見つめ直すきっかけになりました。活動をブラッシュアップしていくことで、今まで以上の活動ができるようにという点に今日の学びを活かしていきます。
- ・誰に共感をいただけたら、どんな活動をできるかを考えるきっかけとなった。
- ・NPO と中間支援と助成財団、それぞれの立場で学びがあり、とても有意義な時間でした。

企画・運営

渡部 芽生（東京ボランティア・市民活動センター）【主担当・報告書】

田中 祥子（デロイト トーマツ グループ）【副担当】

熊谷 紀良（東京ボランティア・市民活動センター）

No.1 1 アート×居場所 ～アートを介してコミュニケーションを深めよう～

開催目的

『地域の居場所』はふれあいサロンやひろば、カフェなどと呼ばれ、身近な交流の場として親しまれています。その気軽さから多様な人が集まり、なかには孤立を抱える人も訪れます。そうした人が居場所でスタッフや利用者同士と接するうちに、地域とつながりなおす機会ともなっています。

一方で、東京藝術大学では東京都美術館と連携し、アートを介した対話の場づくりに取り組んでいます。『文化的処方』といわれる試みは、福祉的な社会課題に対する取り組みとして注目されています。

そこで、本分科会では地域の居場所『岡さんのいえ TOMO』を会場に、東京藝術大学の伊藤達矢先生とオーナーの小池良実さんにお話しいただき、アートを介したコミュニケーションについて理解を深める企画を開催しました。



開催日時

2月10日(土) 15:00～17:00

開催場所

岡さんのいえ TOMO (世田谷区上北沢)

参加者数

21名(参加者12名:うち会場10名、オンライン2名 出演者3名、スタッフ5名)

出演者

伊藤 達矢さん(東京藝術大学社会連携センター 副センター長/教授)

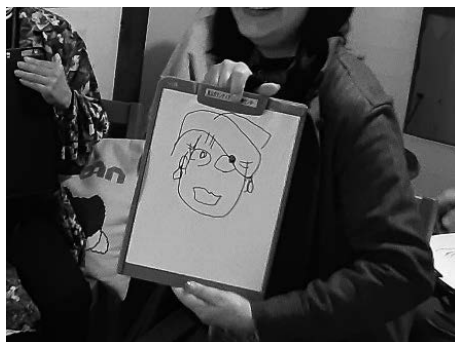
小池 良実さん(岡さんのいえ TOMO オーナー)

齋藤 啓子さん(武蔵野美術大学視覚伝達デザイン学科 教授)

内容・成果・課題

1. 自己紹介タイム

最初に「似顔絵描き」で自己紹介を行いました。参加者が用紙(バインダー付き)を持ち、二人一組で向き合って互いの顔を描き、その絵を見せ合いながら自己紹介をするものです。紙面を見ずに描くというルールのおかげで、どの人の仕上がりも福笑いのような似顔絵になり、会場は笑いに包まれました。打ち解けた雰囲気の中、ゲストトークにうつりました。



2. ゲストトーク

(1) 小池良実さんのお話

小池さんが、大叔母岡ちとせさんから受け継いだ家を、地域や子どもたちのために役立ててほしいという岡さんの思いに寄り添って、居場所の活動を始めてから16年。「みんなのまちのお茶の間をつくらう」をテーマに試行錯誤を重ね、今では小学生や子育て中の親子、中高生や大学生、シニアなど多世代が集う居場所となりました。認知症の方がふらっと現れたことをきっかけに、地域のソーシャルワーカー

カーと始めた「保健室カフェ」などのエピソードが紹介され、多様な方が会うことで新たな試みが動き出す『岡さんのいえ』の一面がうかがえました。

（２）伊藤達矢さんのお話

「芸術で社会に貢献する」をミッションに掲げる東京藝術大学では、福祉、医療、科学、テクノロジーなど39の機関と連携して『「共生社会」をつくるアートコミュニケーション共創拠点』を立ち上げました。拠点では、SDGsが目標に掲げる2030年以降の社会をどうつくっていくかという問いに対し、人の心の豊かさや幸せの実感の必要を提起しています。社会の孤独や孤立を乗り越えるには総合知で取り組むことが重要で、そのためにアートの力で各分野を融合させ、アートを介して人や社会を結ぶ『文化的処方』を開発しています。

『文化的処方（social prescribing）』は、医療的処方に対してQOLの向上やコミュニティとのつながりのなかで健康の維持や回復に取り組むもので、イギリスで始まり、台湾やカナダでも行われています。その実践例『ずっとび鑑賞会』では、藝大の美術館を会場に、地域包括支援センターの呼びかけで台東区在住の高齢者の方々が参加し、アートコミュニケータに誘われながら絵画を鑑賞。しだいに会話がはずむ姿に、アートという文化の持つ力を実感しました。最後に、「地縁など地域のつながりが弱くなった今、個々が集まれる場所が重要で、美術館や図書館では集まる人を文化でつなぐことができる。居場所もそうした大切な場所のひとつ」とのお話がありました。



3. セッション

セッションでは、ゲストに加えてコメンテーターとしてご協力いただいた武蔵野美術大学教授齋藤啓子さんが登壇し、参加者のみなさんの感想を聞きながら意見を出し合いました。参加者は、福祉施設や社会福祉協議会、居場所の運営者、地域でアートと福祉の両方にかかわる方など顔ぶれが多様で、すでに実践している方も多く、『アート×居場所』の可能性には共感の声が聞かれました。この分科会を通して出会った参加者同士の新たなコラボレーションを予感することができました。



参加者の声（アンケート結果などから）

- ・自分の今後の活動の参考にしたいと思い受講しました。ゲストの方の考えと自分の思いの方向性が一緒に大変勇気づけられました。
- ・アートや社会の中での問題意識など、共通な人間が集うことの意味を日々感じていたのですが、お話を伺ってさらにその解像度が上がりました。
- ・福祉の世界にコスパが大きく入り込んできている中でとても考えさせられました。
- ・地域の方とパラアートに取り組みました。アートの取り組みは幅広く、もっと地域や福祉とコラボできるものだと思います。今回の企画にとっても勇気をいただきました。

企画・運営

高山 和久（東京ボランティア・市民活動センター）【主担当】

朝比奈 ゆり（東京ボランティア・市民活動センター）【副担当・報告書】

【企画・運営協力】

山田 翔太（一般財団法人世田谷トラストまちづくり）

No.1 2 図書館という公的な空間から新しい出会いを考える ～図書館×「やさしい日本語」×共生

開催目的

自分との対話を深める場として進化してきた公立図書館ですが、コミュニティの中核としての取り組みも行われています。また、図書館における「やさしい日本語（シンプルに話すことで伝わりやすい日本語）」の実践活動も始まっています。今回は図書館を通した新しい出会いとして、在住外国人との関わりづくりについて、デンマークなどの事例を学びつつ、海外図書館での多文化サービスに詳しい研究者と図書館関係者との対話セッションを行い、地域における公的空間を活用した新しい出会いと共生について考えました。

開催日時

2月10日（土）13:30～15:30

参加者数

30名（参加者19名：出演者2名、スタッフ3名、ボランティア6名）

出演者

和気 尚美さん（三重大学 情報教育・研究機構 招へい教員）

原島 正臣さん（武蔵野プレイス館長）

内容・成果・課題

1. 内容

○13:00 受付開始、13:40 まで館内自由見学

参加者にはデザインの・空間的にも考えぬかれた武蔵野プレイスを体感してもらうために、開始時間30分前に集ってもらい、館内を自由に見学してもらい、その時に感じたことを付箋に書いてもらい、それをボードに貼り付けるという事前ワークを行いました。

○13:43～13:50 開始挨拶、本日の主旨と流れ説明（新居）

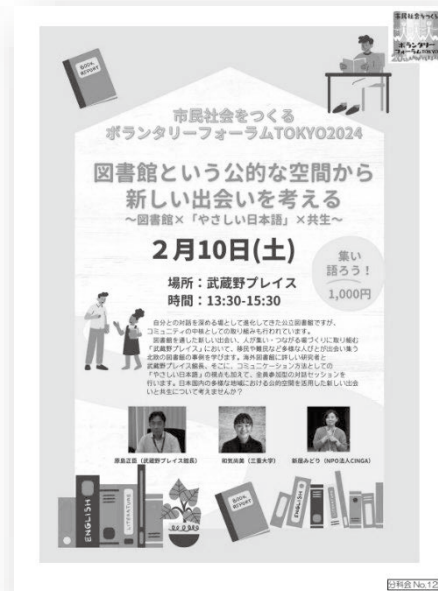
○13:50～14:10

「～ひと・まち・情報 創造館 武蔵野プレイス～」（原島）

市民参加型でつくられた武蔵野プレイスの歴史と共に、工夫がなされているデザイン、そしてなぜ「プレイス」という場を大事にしているのか説明がありました。また、プレイスとして10代の若者の利用率が高いこと、若者や親子が集い、にぎやかな空間と静かな図書館空間とのゾーニングについてもお話がありました。

○14:10～14:38「弱い紐帯を育む北欧の公共図書館」（和気）

北欧の図書館が移民に対してどのようなサービスが提供されているのか、その背景にある法律のこと、図書館にかかわる職員のこと、また財政的な負担のことなどの多岐にわたる説明がありました。そして「弱い紐帯」の大切さについて、実際の写真をたくさん提示してもらい説明をいただきました。印象的だったのは、移民の子どもたちの宿題教室がひらかれた空間とな



っていたこと。柔らかなソファで勉強していて、そのコーナーはにぎやかにしても問題がなく、人目に付きやすい図書館の入り口に付近にあること。そこには果物や飲み物が提供されていて、だれでも参加できそうな雰囲気であること。お互いにフルネームや住所を知らなくてもいい、しかし、ひとの存在があり、自分の存在も認識される、図書館という公的な空間において、ゆるやかなつながりが生まれることについて学びました。

○14:38～質疑応答

○15:00～「やさしい日本語とは」、
グループディスカッションの進め方（新居）

○15:05～グループディスカッション
「夢の図書館における図書館の中での禁止提示とは？」

○15:23～振り返り（参加者全員からひと言感想）

○15:36～講師感想

○15:45 終了、休憩



2. 成果

分科会を通して、図書館という公的空間における新しい出会いについて、参加者が自分の思いを語り合う機会が作られたことが大きな意義があったと思います。図書館領域、市民活動領域、外国人支援を含む多文化共生領域のそれぞれ別々の領域関係者が同じ場所に集い、自分の関心事項だけではなく、他領域のメンバーと違う視点から対話することができました。また、会場を武蔵野プレイスにしたことで、市民の出会いをどのように工夫しているのか、ゾーニングをどのように実施しているのかを身体的に確認できたことも大きいと思います。また、北欧の実践事例を「紐帯」という視点から考えることができたのは、北欧の実践を夢のような話として聞くのではなく、自分1人からでもできる実践と捉えて聞くことができました。最後の、多様なメンバーにおけるグループディスカッションのタイトルを「夢の図書館における禁止提示とは？」という挑戦的なものにしたことで、「やさしい日本語」の活用も含めて、人が集うときには最低限どのような配慮が必要なのかを考えることもできました。

3. 課題

多様な人が集い対話したことを、いかに地域や現場で実際の活動につなげるのか、そこが課題であると思います。それは登壇、参加メンバー各方向からの感想からも出ています。1回きりの出会いとしてだけではなく、継続的なつながりができるような工夫ができると良いなと思っています。また、活動を作っていくプロセスを作るには、分科会でどのようなことができるのか、そこを挑戦的に考え続けたいと思っています。

参加者の声（アンケート結果などから）

- ・公共図書館に勤めており、やさしい日本語のホームページや利用案内を作成中で勉強のため参加。基盤になる考え方がわかり良かった。海外の図書館の事例、またプレイスの事例が非常に興味深かった。・スピーカー、参加者（グループ）との対話、共に多くの気づきがあった。
- ・武蔵野プレイスに来てみたい＋北欧図書館が気になっていて申し込みした。図書館の役割を改めて考え直す機会になった。何か新しいことをしようとするとうるさくうるさくした交流活動を考えがちですが、「ゆるくつながる」「居るだけでよい」場を確保するというのが大事なのかかもしれないと考えた。

企画・運営

新居 みどり（NPO法人国際活動市民中心(CINGA)）【主担当・報告書】

市川 徹（株式会社世田谷社/一般財団法人世田谷コミュニティ財団）【副担当】



No.13 おひとりさま（あるいは頼れる人のいない）高齢者の終活支援を考える

開催目的

単身高齢者の増加と社会的孤立が問題になってきています。このような身寄りのない単身高齢者を、日頃の日常生活から死後の手続きまで、地域で支えていくにはどうしたらよいのだろうか？現在の単身高齢者の現状を知るとともに、保証人がいないでも住める居住支援法人の指定を東京都から受けて活動されている取組事例・社会福祉協議会での取組み事例を紹介しながら、現状の制度や取り組みでは支えきれなくなっている課題をみなさんと一緒に考えていきたいと思います。

開催日時

2月10日（土）16:30～18:30

参加者数

47名（参加者47名：うち会場13名、オンライン21名 出演者4名、スタッフ4名、ボランティア5名）

出演者

沢村 香苗さん（株式会社日本総合研究所）

陶山 慎治さん（社会福祉法人悠々会 理事長）

林 悦子さん（文京区社会福祉協議会 地域福祉推進課）

近藤 秋穂さん（文京区社会福祉協議会 連携ステーションフミコム）

内容・成果・課題

1. 沢村さんから高齢者の現状について

高齢者が入退院を繰り返す時、家族の場合は伴走支援が続くが、おひとり様の場合、その支援は、施設が移転するたびに担当が代わり途切れ支援が続きません。

また、賃貸に住まわれている方が死亡すると残された家財（残置物）の所有権や相続人の有・無がわからない場合、処理が困難になることがあります。また、入院時の費用支払いの問題、治療の同意、死後の遺体引き取りなど取り扱いが困難になるため身元保証が求められています。

これらは、ばらばらの事案として扱われており、社会問題として認識されませんでした。いままでは家族だよりでしたが、おひとり様の高齢者が増加して、ライフスタイルが多様化しており、新たな課題が出てきている事をお話いただきました。

これまで所管官庁がありませんでしたが、厚生労働省が実態調査をすることになりました。制度には必ず隙間はできるので、それを埋める地域の支援者との連携の必要性をお話になりました。最後に、問題解決のため、短期的・長期的な対応を話され、地域での情報連携の仕組みの提案がありました。

2. 陶山さんより「あんしん住宅事業」の取り組みと概要について

頼れる人がいない障害者・身寄りがいない高齢者などで保証人がいないことを理由に部屋を借りられない方を支援する「あんしん住宅事業」の仕組みと概要をお話になりました。「住まいが安定」してこそ、その後の生活の事を考えられるとの考えから取り組み始めました。

住宅を借りれない人がいたら、悠々会が借り上げている部屋をお貸しをしています。入居されてからの生活のサポートも提供し、入居者が死亡した場合も、すべて処理するサービス付き部屋をお貸しする仕組みになります。町田市役所から「住まいの電話相談事業」の委託を受けて町田市の医療機関、地域包括支援センターなどから、「住まい」というキーワードで悠遊会に連絡があり、そこからいろんな困りごとの相談を受けており、その中の相談から入居される方が多くいらっしゃいます。現在、高齢者のほか・障害者・外国籍の方や避難者の方を含め約100人位入居されています。うち高齢者は約60%位

で、年を追って相談件数も増えている状況です。具体的事例として、85歳のご夫婦、奥さんが認知症で特別養護老人ホームに入居、その施設の傍でアパートを探しているが、高齢ということで入居できなくて困っているケースなど支援等事例を挙げて説明がありました。入居者は、入居したのだからあとは一切ほっておいてくれというケースでは見守りができないので、その後の生活相談も悠々会の生活支援ネットワークを使い可能な限りフォローできる体制をとっています。また、安心住宅に住んでいる方には、地域とのつながりをもてるよう入居者の地域での移動支援、地域の中でお友達ができる環境づくりを行い、悠々会を中心に最後までその人の尊厳保たれる地域づくりをしていることの報告がありました。

3. 林さん・近藤さんより「文京ユアストーリー」の取り組みと概要について

この事業は、預託金を預かって行い、定期連絡し地域活動の参加をサポート、見守りを行い認知機能が低下・入院・入所時に適切な制度等へのコーディネートや支援を実施・死後事務を行うことで住み慣れた地域で安心して生活できることを目標とした事業との説明がありました。

身寄りのない高齢者が保証人をたてられず入居できないという相談や、高齢になり、心身状況の悪化等により地域とのつながりがほとんどなくなり、頼れる人がおらず不安で困っているなどの相談が増えてきたことが、この問題に取り組むきっかけだったと説明がありました。当時、福岡市社会福祉協議会が高齢者の移住支援事業から派生し、先行して終活問題にも取り組んでいたため、それを手本に文京区社会福祉協議会内でプロジェクトチームを作り検討し、外部の専門家の意見を取り入れ文京区という地域にあった「文京ユアストーリー」を立ち上げたと説明がありました。事業を行ってみて、戸籍についての課題や、死後にペットの取り扱いをどうするかなど、当初想定していた以上にさまざまな専門性が必要な課題があることが分かったとのこと、社会福祉協議会として対応に悩む事案は、弁護士や医師など専門家で構成する審査会で相談できる体制をとっているお話がありました。

4. 質疑応答

①高齢者への周知の方法は、どのようにやっているのか？（林さん・近藤さんへ）

地域包括支援センターや病院などからこういう方がいるので相談にのって欲しいとの要請がある。

②行政から相談を受けることがあるのか？（陶山さんへ）

行政からの依頼はことわらずすべて受けている。行政サービスだけでは、本人の要望を満たすのは難しいので、民間企業と連携して対応できるように心がけて商工会議所とのパイプも広げている。

5. 課題

民間と公的機関の連携で構築が可能と考えるが、契約してから亡くなるまで長期にわたる取り組みでかつ死後の処理、相続などにもかかわることであり、利用する方にどのように安心をもっていただくかの仕組みづくりが必要だと思いました。



参加者の声（アンケート結果などから）

・今後取り組みたいと思っていた課題であったため、貴重な意見や実践が伺えて良かったです。
・色々なサポートが充実してそうに見えて、意外と課題とか不足してる部分があったり、大変だなんて思う部分が見えました。でもその中で、その問題解決に携わる入り口を入りやすくすることでプラスにとらえることもできました。登壇者の方もおっしゃっていた、高齢化で高齢者が増えて大変ではないステージを作っていかなくはいけないという言葉が凄く自分の中で響いて、自分は関係ないという気持ちではなく社会問題に関わっていけるように学んでいきたいなって思いました。

企画・運営

岩崎 克己（町田市玉川学園地区社会福祉協議会（公募））【主担当・報告書】

太田 学（東京ボランティア・市民活動センター）【副担当】

No.1 4 多文化共生のイマを知る ～多文化共生の「自分ごと化」～

開催目的

多文化共生の実現には、地域社会で外国人と共生していくという思いや考えを持つことが必要だと考えています。日本人は多文化共生に触れ合う機会が多くないことから、多文化共生の意識が広く浸透していないと感じています。本分科会の目的は、多文化共生を自分ごとのように考えるきっかけづくりや、個々の意識に働きかけることによって、現状をどう変えていくことができるか考えていくことを目的としました。

開催日時

2月10日（土）16：30～18：30

参加者数

31名（参加者18名：うち会場10名 オンライン8名 出演者2名、スタッフ9名、ボランティア2名）

出演者

山路 健造さん（一般社団法人多文化人材活躍支援センター 代表理事）
ポジダイエヴァ・アンナさん（一般社団法人多文化人材活躍支援センター 理事）

内容・成果・課題

1. 内容

（1） 山路健造さんから多文化共生の現状と課題について

まず初めに、一般社団法人多文化人材活躍支援センターでの活動内容や法人を設立した想いについてお話がありました。外国人増加はマイナスイメージを持つ人々が多いため、「誰もが活躍して輝ける社会に」をモットーに、国境を越えて活躍できる人材育成や支援に取り組んでいます。

次に、多文化共生の課題として、ライフステージやライフサイクルについて考える必要があるというお話がありました。この言葉の本質として、幼児期、学童期、青年期、高齢期とそれぞれのライフステージで多文化共生の課題が変化していきます。例えば、幼児期・学童期では出産時の医療での多言語対応、外国人のママ友、学校からのお知らせを親が読めないなどがあり、青年期では仕事や転職、地域との交流、結婚やビザ（手続きが大変）などがあり、高齢期では年金、介護（こども返りで日本語が出てこなくなる）、墓地の問題などのお話がありました。しかしながら、国籍、ビザ、言葉以外は日本人でも当てはまる課題ではありますので、外国人と一緒に考えていく必要があります。

最後に、多文化共生の担い手が不足しているお話がありました。私たち日本人が日本に住んでいる外国人に対して、「やさしい日本語」で話すことや同じ「生活者」として外国人に温かい目線を持つなど小さなできることを実践する大切さについてお話がありました。

（2） ポジダイエヴァ・アンナさんから当事者目線の想いを聞く

アンナさんは2000年代初めに福岡で美容学校に通っていた経験があり、日本語（N3からN2）が堪能です。その後、母国であるウクライナに帰国し、ビューティーサロンを経営していましたが、ロシアのウクライナ侵攻をきっかけに日本で住むようになりました。日本の各自治体でウクライナからの避難民受け入れを行っていて、アンナさんは東京都の支援を受けることができます。

次に、日本に移住した際の仕事探しについてのお話がありました。日本で仕事探しが難航し、なかなか仕事が決まらなかったことや、ウクライナでは専門職として働いていたが、日本では同じ専門職で働くことができないということが課題としてお話がありました。

そして、文化の違いで困惑することや、日本語特有の漢字、ひらがな、カタカナ、読み方、尊敬語、丁寧語などで苦労しているお話がありました。日本語の難しさがあり、日本に住むにも乗り越えないといけない課題が多くあるというお話がありました。

(3) グループトーク

出演者のお話を受けて、内容の理解を深めるために、グループワークの時間を設けました。グループワークのアウトプットを代表して2つ紹介します。「多文化への理解や外国人だから英語やほかの言語で話すなど特別扱いをするのではなく、やさしい日本語でわかりやすく伝えることが大切だと感じました。」や「外国人向けの防災ポスターに書かれている日本語が難しく、内容が伝わっていないという問題があるので、ポスターや食品パッケージなどにやさしい日本語を広く活用していく必要があると感じました。」というアウトプットがありました。

(4) 質疑応答

いくつか質問がありましたが、2つの質問を代表として紹介します。1つ目の質問では、「日本は他国と比較して、外国人に対してやさしい国ですか？」という質問に対して、「残念ながら、日本はやさしい国になりきれていないです。例えば、ドイツでは外国人にドイツ語を教えるなど国からの積極的な支援があります。日本人は外国人に対して、まだ壁みたいなものがあるのではないかと感じています。」というお話がありました。二つ目の質問では、「外国人が日本でEC、リアル問わず買い物をする際に直面する困りごと等がありますか？」という質問に対して、「外国人は日本でクレジットカードが作れないので、クレジットカードを利用した買い物ができないといった課題があります。」というお話がありました。

2. 成果と課題

多文化共生の現状と課題を知ることで、外国人のためにどんなことができるかを考えるきっかけになったと感じています。今後の課題は、「やさしい日本語」を広く普及していき、日本が外国人に対して感じている壁を取り除くことだと考えています。



参加者の声（アンケート結果などから）

- ・山路さんより具体的で貴重なお話を多数聞くことができ、さらにアンナさんからウクライナから避難されている方々の生の声や悩みを聞くことができ、大変勉強になりました。母国で専門職に就いていた方が、日本で同じ仕事ができずにいるという点に心が痛みました。外国人の方々が努力して乗り越える課題ではなく、日本人側が考えるべき課題だと痛感しました。
- ・これからの日本には多文化共生が必須なので、学ぶ必要性を感じていました。アンナさんのお話から文化の違いだけではなく、言語の違いでの弊害が多岐に渡ることを痛感しました。やりたいことができない、できることができない、本当に心が痛いです。日本語の特有さを愛しながらも、やさしい日本語も共通語にしていく必要があると思います。
- ・留学を経験した身にとっては、この分科会はとても身になるものでした。今だからこそ日本語の難しさをかみ砕いて、やさしく教えることが大切だと思いました。

企画・運営

犬塚 尚樹（NPO 法人ふれあいの家 おばちゃんち）【主担当・報告書】

秋本 美帆（中央大学文学部）【副担当】

No.15 ボランティア・市民活動推進のあり方と未来を考える

開催目的

23 年度に「東京におけるボランティア・市民活動推進のあり方に関する検討委員会 2023」（以降あり方検討という）がまとめられ、コロナ禍を経て増大した格差や分断などが浮彫になりました。社会参加の流れも単発のイベント参加など気軽な関わり方（エピソードック）になりつつあります。この変化に各区市町村のボランティア・市民活動推進機関はどのように対応するのか、私たちはどのような社会を目指せばよいのでしょうか。この分科会を通してディスカッションを行いました。

開催日時

2月10日（土）16：30～18：30

参加者数

52 名（参加者 41 名：うち会場 21 名、オンライン 20 名 出演者 4 名、スタッフ 5 名、ボランティア 1 名）

出演者

【登壇者】

枝見 太朗さん（社会福祉法人東京都共同募金会 常務理事・事務局長）

茨木 尚子さん（明治学院大学社会学部教授）

梅澤 稔さん（板橋区社会福祉協議会 いたばし総合ボランティアセンター/日本福祉教育・ボランティア学習学会特任理事）

【コーディネーター】

上田 英司さん（特定非営利活動法人日本 NPO センター/狛江市市民活動センター「こまえくぼ 1234」運営委員長）

内容・成果・課題

1. 【内容】

（1）コロナ禍を経たボランティアコーディネーション

前身となる検討会から6年が経過しました。当時は東京ボランティア・市民活動センター（以下 TVAC という）としてのあり方検討でありましたが、この6年でコロナ禍に突入し、ボランティア活動で最も大切な「人との関わり」がどんどん無くなっていきました。社会が大きく変わってゆく中で、ボランティアコーディネーションはどうすべきなのかの議論もできないまま、場当たりにできることをやって行くしかない状況でした。

（2）結び付けなかったオリパラのボランティア

この間にオリンピックパラリンピックの開催もされ、ここには7万人ともいわれるボランティアの存在があり、エピソードックといわれる関わり方の新しい層のボランティアでした。一方で、この新しい層を中間支援として結び付けることができませんでした。中間支援がコーディネーションできているのかを、改めて問い直す必要もあるのではないかと議論も、きっかけになっています。

（3）コーディネーションの機能

多くは社会福祉協議会や大学の担うボランティアセンターや、あるいは行政の設置する市民活動センターなどですが、今は企業の中の部署や、街中のスーパーの伝言板も含めさまざまな形で、ボランティアセンターと名乗らないコーディネーション機能を持つ形態があります。これらのさまざまな形態を含め、TVAC として情報を投げかける必要があるのではないか。ということも大きな委員会のテーマになりました。

2. どのような社会を目指すのか

（1）市民の当事者性

施設のボランティアはさまざまな市民が入りさまざまな視点が入ります。ここに培ってきたものもあるはずですが、しかし、コロナ禍で断たれ仕方がないということではなく、限られた中で、どうやって関わるのかの視点も必要なのではないかという意見もありました。特にコロナ禍は支援する側され

る側双方、生活のしづらさを感じていました。これらをどうやったら解決できるのかを一緒に考えていくことが、双方の市民としての当事者性であり、とても大切なのではないかとということが話し合われました。

(2) エピソードボランティア

気軽に参加できる機会はこれまで社会福祉協議会も夏の体験ボランティア等で作ってきたはずで、これが今改めて議論になっていることを受け止める必要があると思います。一方で、その機会を作りっぱなしになっているのではないかと指摘もあります。改めてエピソード的な関わりを次のステップにつなげるのかを考える必要があると感じています。



2. 【成果】

(1) 当事者性・他者性への気づき

違いが生まれるなかで、マイノリティがうまれる理由はなぜなのか、自分が当たり前と思っている特権といわれるものが何なのか、気づくという市民の新しい連携につながるのではないかと感じています。運動性が弱まっているのではないかとされている現在、市民の中の当事者性や他者性がピアな関係性やアライシップにどうつながっていくか、自分とは違う市民とどうつながっていくのか、気づきができるような仕掛けを作るのもコーディネートの大事な役割だと思います。また、当事者運動の中で、よく言われる「我々のことを我々抜きで勝手に決めるな」(英語: Nothing about us without us!) 市民運動も同じで、我々抜きに語るなど、いえるような強さが必要だということの気づきも得られました。

(2) 意思

社会と関わるときに「意思」が持てることが大切だと思います。かつて意思を持ったボランティアが実績を作り、24時間介護やバリアフリーが法整備され、事業者ができるようになりました。ボランティアが必要とされる背景には社会的な欠陥があるのではないかと。今後ボーダレスな社会が生み出されるのであるならば、なおさらボランティアにしかできないということがわかりました。

3. 【課題】

・どうするボラセン(ボランティア・市民活動センター)

このように、現状認識や問題意識など様々な角度で検証され、検討委員会で道筋をまとめてもらったように思います。これをもとに「どうするボラセン」を話していかないと、ボランティア・市民活動センターのあり方は変わらないのではないではないでしょうか。今後この件について動画やホームページも開設予定です。そのほか、TVACやあり方検討の委員と、各地域で勉強会を実施するのも良いのではないのでしょうか。今回の分科会参加者をはじめ、各地で勉強会など実施できれば、各地域の中で議論されることを期待できると思います。

参加者の声(アンケート結果などから)

- ・行政と中間支援組織の関係性について、それぞれのミッションにもとづき特徴や特性を活かして手を取り合って、市民活動をサポートしていきたいです。
- ・問題をわかち合う場、語ってもらう場をつくるためにどんな仕掛けが必要なのか考えさせられた。
- ・このような原理的な議論ができる分科会は毎年必要だと感じています。

企画・運営

高橋 義博(府中市市民活動センター プラッツ/Tripod)【主担当・報告書】

市川 徹(株)世田谷社/一般財団法人世田谷コミュニティ財団)

【企画協力】

熊谷 紀良(東京ボランティア・市民活動センター)

加納 佑一(東京ボランティア・市民活動センター)

No.16 交流会「ミ・ラ・イ☺カフェ」

開催目的

分科会の時間だけでは話さきれない！！もっと参加者同士で話したい！そんな参加者の皆さんや出演者、実行委員などが、会場で自由に語り合える場として企画しました。また、交流会の様子もオンライン中継で実施しました。

開催日時

2月10日（土）19：00～20：00

参加者数

56名（参加者23名：うち会場19名 オンライン4名 ボランティア9名、スタッフ24名）

内容・成果・課題

今年度も昨年度に引き続き、会場とオンラインの併用によるハイブリッド形式で交流会を開催しました。昨年度は会場参加とオンライン参加の参加者数は同程度であったのに対し、今年度は会場参加の人数が大幅に多かったです。また、会場では軽食（サンドイッチとお菓子）と飲み物をを用意して開催しました。

最初にアイスブレイクとして、言葉を一切使わずに身振り手振りのみで参加者同士で誕生日順に並ぶことをしました。簡単そうに見えますが、間違いもあり非言語コミュニケーションの難しさを体験することができました。

次にグループに分かれて、「自己紹介」と「ボランタリーフォーラムに今回なぜ参加したのか？」を共有してもらいました。その後、タイムカプセルとして「来年どのような自分になっている？なりたい？」をテーマに各自紙に書いてもらい、ガチャガチャに封入しました。このガチャガチャは来年にご自分で開けてもらい、1年前の宣言と現在のご自分を確認してもらうことができます。

最後に、フリートークとして会場参加者同士でそれぞれ交流を深めてもらいました。1月1日に発生した能登半島地震の災害支援に行った実行委員が3名いましたので、参加者のなかで現地の状況や災害支援に関して聞きたい方には、ご案内をしました。

ボランタリーフォーラムの目的の一つに「交流」することがあります。誰もが気軽に交流会に参加できるように、昨年度に引き続きハイブリッド形式での交流会を開催しましたが、オンライン参加者の人数が減ってきている事を鑑みて、開催方法については今後の課題として考えていく必要があると感じています。





企画・運営

- 犬塚 尚樹（NPO 法人ふれあいの家 おばちゃんち）
 神元 幸津江（NPO 法人全国災害ボランティア支援団体ネットワーク(JVOAD)）
 久保 賢人（社会福祉法人中野区社会福祉協議会 中野ボランティアセンター）
 村下 初海（コーダえん）
 太田 学（東京ボランティア・市民活動センター）

No.17 10年後の「超ボランティア社会」を想像する

開催目的

ボランティアがもっと身近になってほしいという課題を踏まえ、本当に身近になったらどのような社会になるかをバックカスティング的に考える分科会を開催しました。ボランタリーフォーラム全体のテーマでもある「希望ある未来」を想像することによって、そこにつながるように現在の、そしてこれからの日々の暮らしやボランティア活動に思いを巡らせることができます。

参加者が集まって話し合いながら、いろいろなアイデアを考えたり、それらをシェアしたり、情報を共有したりすることで、現在ボランティア活動を行っている方にとっては活動の意義を感じ、活動の幅を広げていくこと、現在ボランティア活動を行っていない方にとっては、ボランティアに関心を抱き、参加への意欲を持つことにつながることを目的として開催しました。

開催日時

2月11日（日）9：30～12：00

参加者数

13名（参加者5名：スタッフ6名、ボランティア2名）

出演者

ファシリテーターとして実行委員2名

内容・成果・課題

1. 内容

（1）アイスブレイク（他己紹介）

ブレインストーミングを行う前に、各テーブル（参加者の人数の関係で、当日は一つのテーブルで実施しました）で話しやすい雰囲気を作るためのアイスブレイクとして他己紹介を実施しました。

まず、二人一組になってお互いについてそれぞれ5分ずつインタビューをしました。インタビューした内容をそれぞれでまとめた上で、順番にインタビューした相手のことを1分以内に紹介しました。

お名前などの一般的な事項のほか、ボランティア活動について（活動経験、関心のあること、日ごろ思っていること、など）も他己紹介してもらうことで、この後に実施するブレインストーミングで話がしやすいようにしました。



（2）ブレインストーミング（10年後の「超ボランティア社会」を想像する）

10年後に「超ボランティア社会」（注：あらゆる分野で老若男女誰もが日々当然のようにボランティアを行っており、自身の身近にも様々なシーンでボランティアが活躍している社会）になっているという前提で、アイデア出しをしていきました。

まずは、「どのような分野で」「どのようなことが起きているか」を5分程度で一人ひとり考え、付せんに書きました。その後、付せんを模造紙上に広げながら話し合い、さらに発想を広げていきました。



「学校教育の場にたくさんのボランティアが関わっている」「ロボットやAIを使った活動」「声かけや助け合いが頻繁に行われている」といった発想のほか、「政治とボランティアが分け隔てなく関わるようになっていく」と「政治に影響されずにボランティア活動が活発に行われている」ということが両立して成り立っている、さらには「ボランティアという言葉が無くなっている」というところまで想像を膨らませました。

終了の前にアイデアを少し整理する時間を設けましたが、想像が膨らみすぎたのか、付せんが多すぎて整理するのが大変でした。



(3) まとめ

まとめとして、「今から10年後のお昼のニュースを作る」という企画を実施しました。当初は、テーブルごとに一つのニュースを作る想定でしたが、テーブルも一つだけでしたので、参加者一人ひとりに作ってもらう形式に変更して実施しました。

ブレインストーミングで出されたアイデアから参加者の皆さんがそれぞれ面白いと思ったこと、特徴的な事象など取捨選択してニュース原稿を作成しました。原稿作成中は皆さんかなり悩んでいる様子で、難しい企画だったかと思いましたが、時間いっぱいまでしっかりと原稿を書き込んでいました。

参加者の皆さんにニュースキャスターとなってもらい作成した原稿を発表していただきました。地域のボランティア情報をたくさんお伝えするニュースや、ほんわかするような面白ニュースを4つも発表した方もいらっしゃいました。皆さんそれぞれ創意工夫されていて、非常に良かったと思います。



2. 成果・課題

ブレインストーミングでは想定していた以上に多くのアイデアが出されました。これによって、参加者の皆さんの思考が深まったり、視野が広がったりしたと思います。

参加者からは、これまで10年後のことなど考えたことが無かったので、面白かったという声が聞かれました。終了後のアンケートには、「明日からの活動に活かしたい」「ボランティア活動を積極的に応援したい」というコメントがあり、単に面白かったで終わることなく、それが日々の行動につながることを期待できます。

参加者の声（アンケート結果などから）

- ・いろいろな世代の方と話し合いができ考え方を知ることができ有意義でした。10年後の…等考えたことが無かったので考えるよい機会となりました。
- ・10年後という近からず遠からずの未来を想像してみる機会はなかなかないのでどんな感じになるのかな?と思っていましたが、いろんな意見が出てきたし、自分の考えと一緒にという意見もあってとても楽しかったです。
- ・ボランティアの可能性の高さを改めて知り、ボランティア活動を積極的に応援したいと思います。

企画・運営

富安 義樹（生きづらわーほりプロジェクト）【主担当・報告書】

岩崎 克己（玉川学園地区社会福祉協議会）【副担当】

神元 幸津江（NPO 法人全国災害ボランティア支援団体ネットワーク（JVOD））【副担当】

佐藤 純（NPO 法人 Hand Over Japan（HOT））【副担当】

No.18 暮らしに合わせた在宅避難を考えよう！ ～私の備えと、みんなの備え～

開催目的

東京都は首都直下地震により最大約300万人の避難者を想定しています（令和4年度）が、地域や自宅に危険がなければ、自宅に留まる在宅避難も選択肢のひとつです。この分科会では、在宅避難に必要な携帯トイレや非常食の展示・体験のほか、誰もが楽しみながら参加できるワークショップを通して、マンション・戸建て、一人暮らし、乳幼児・ペット・介護など、私たちの暮らしに合わせた備えをみんなで考えることを目的に開催しました。

開催日時

2月11日（日）9：30～12：00

参加者数

21名（参加者13名、出演者1名、スタッフ5名、ボランティア2名）

出演者

宮崎 賢哉さん（一般社団法人防災教育普及協会 教育事業部長）

内容・成果・課題

1. 内容

（1）栄養を補う非常食づくり

まず初めに、「（在宅）避難生活中、アルファ化米を食べようとしたら、水が出ない！家を探したら、野菜ジュースが出てきた…」という場面設定のもと、栄養素を補いつつ、且つ無駄な水を使わずに非常食を作る方法について学びました。各班、アルファ化米（白米4班、ドライカレー1班、五目御飯1班）に野菜ジュース1缶を入れて混ぜました。通常そのままの状態だと出来上がるまでに80分以上掛かってしまうため、今回は時間短縮のため、宮崎先生が持参されたモーリアンヒートパックという水を入れるだけで加熱できる加熱材の中にアルファ化米を入れ、外から少しでも加熱を促しながら調理をしました。

（2）アイスブレイク・自己紹介

導入講義に入る前に参加者は氏名（団体名）、居住地（区市町村）、参加した理由、好きな食べ物をアイスブレイクシートに記載し、各班で今日から一番、誕生日に近い人を探して、その方から時計回りに自己紹介をしました。

（3）導入講義

導入講義では、被災後の暮らしで困ることの紹介の他、災害は平等に起こるが、被災は平等ではないことから暮らしや特性に応じて備える必要があるという説明がありました。また、物の備蓄と知識の備蓄という観点から、配布資料の「減災グッズチェックリスト」（阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター発行）と被災した時に役立つ制度や仕組みを知っておく「被災者支援チェックリスト」（関東弁護士会連合会発行）が紹介されました。

（4）災害時のトイレの備え

災害時、家庭や地域の安心のためにまず確保する「3つのこと」として、①トイレ、②水道（食事）、③休憩（睡眠）があげられました。まずは各班で携帯トイレを実際に体験しました。参加者は袋に給水ポリマーと500mlのペットボトルの水を入れ、ゼリー状になる様子を観察しました。参加者は始



め、500mlもの水を袋に入れても本当に大丈夫かと心配した様子でしたが、ゼリー状に変化する様子を確認し、携帯トイレの使用方法和利便性を理解しました。

また、携帯トイレを体験した後は、「すぐトイレに行きたい！でも仮設トイレは30人待ち！携帯トイレは使いきって、もうない！」という状況設定のもと、各班で段ボールトイレを作りました。各班に与えられた材料は、段ボール2枚、新聞紙1日分、ビニール袋（45L）2枚、ガムテープ、カッターのみで、制限時間は15分間です。各班アイデアを出し合いながら個性あふれる段ボールトイレを製作し、最後はみんなで各班の段ボールトイレを見てまわりました。参加者は実際に他の班が製作した段ボールトイレに座ってみたりして、座り心地、強度などを確かめ合いました。



（5）非常食を食べてみよう

分科会冒頭で作った野菜ジュースで戻したアルファ化米を試食しました。参加者からは「悪くない!」、「美味しい!」との声が聞かれました。白米よりは、ドライカレーや五目御飯の方が食べやすかったようです。また宮崎さんが分科会当日の朝、ご自宅で炊飯袋に普通のご飯1合とお水とお茶漬けの素を入れて鍋で炊いたご飯を持参下さり、参加者で試食しました。

（6）在宅避難ワークショップ「私の備え、みんなの備え」

在宅避難ワークショップでは、まずひとりひとり、A3用紙の小さなマス5つ×市区町村・想定される災害、家族構成・ペット、自宅（戸建／集合／階数等）、災害時に心配なこと、既に取り組んでいる対策を記入しました。記入後、全員のシートを封筒に入れ、講師に渡します。各班に他のいずれかの班の封筒が戻ってくるので、中からシートを取り出し、それらを見て、大きなマス（家族全員が5日間在宅避難に必要な備え）をみんなで考えて書きました。その際、なるべく品目・個数などは具体的に、そして家族構成や心配なことを意識した備え、グッズも考えるよう指示がありました。最後に各班から考えた備えを発表しました。発表では、1人暮らし、高齢者、ペット、障がい児など、各々の暮らしに合わせた具体的な備えやアドバイスが交わされました。



2. 成果と課題

在宅避難について、講義形式ではなく体験型にしたことで、参加者も実践を通して学びを深めることができました。また在宅避難ワークショップでは、自分の暮らしについて自分で考えるのではなく、他の人の暮らしに対する備えやアドバイスをみんなで考えることにより、在宅避難に必要な備えへの理解を深めることができました。最後に宮崎さんよりエビングハウスの忘却曲線が紹介されましたが、人は1日後には74%忘れる生き物だそうです。ただそれは自分にとって無関係だと思っている事象に対してだそうです。なかなか各家庭での防災備蓄が進まないという課題がある中で、今日の学びを自分事とし、周りの人に伝えていくことで、在宅避難の備えを進めることにつながっていくと感じました。



参加者の声（アンケート結果などから）

- ・グループでアイデアを出し合ってトイレを作ったこと、予想外でした。とても楽しく防災を学びました。在宅避難をするためにはトイレが大事だということわかりました。
- ・アルファ化米もひと工夫で味の変化だけではなく栄養もとれること、皆さんに広げていきたいです。

企画・運営

堀尾 麗華（認定NPO法人難民を助ける会（AAR Japan））【主担当・報告書】

久保 賢人（社会福祉法人中野区社会福祉協議会 中野ボランティアセンター）【副担当】

No.19 対話：健康（ウェルビーイング）と社会貢献

開催目的

みなさんはボランティアな活動と健康には関係があると感じますか？

この問いのもと、集まった「全員」の経験やエピソードを結集する、対話の場を設けました。

ここでの健康とは、身体的／精神的／社会的に十分に満たされた（＝ウェルビーイング）状態のことです。このフォーラムには、健康と社会貢献の関係について、すでに様々な経験やエピソードをお持ちの方がたくさんいらっしゃると思えました。しかし、現場で得た経験は、職場やチーム内で話されることはあっても、職種や業種を超えての共有の機会はなかなかないのではないのでしょうか。そこで、活動の分野、肩書、年齢など関係なく、一人ひとりが持っている「健康と社会貢献」に関する経験やエピソード——たとえば「ボランティアな活動が身体や心の回復を早めるか」「慢性疾患をケアするか」「ボランティアな活動をすると生活の質が改善するか」「逆に不健康になることはあるか」など——を重ね合わせる場を創ることを目的にこのセッションを行いました。

普段は聴き役に徹している方、体験から思うことがあるが言語化できていない方、他の方の意見を聞きたい方にもぜひこの対話に参加してほしいと考え、計画しました。



開催日時

2月11日（日）9：30～12：00

参加者数

13名（参加者6名、出演者1名、スタッフ5名、ボランティア1名）

出演者

ファシリテーター：野際 里枝さん（あびこ市民活動ステーション）

内容・成果・課題

1. ファシリテーターのもと、参加者、スタッフ、ボランティアをふくめ13名全員でオープン・スペース・テクノロジーの手法で対話をおこない、健康と社会貢献の関係について考えをふかめました。

2. タイムライン

- ・開催目的の説明（10分）
- ・風船アイスブレイク（20分）
- ・対話のしかたの説明（10分）
- ・対話①～③（75分）
- ・気付きの共有（30分）



3. 風船アイスブレイク

10種類の問いが書かれた風船を一人ひとり持ちます。問いは「自分を色でたとえたら？」「私のプチ自慢」「最近ハマっていること」「あえてやめていること」「もし20年前に戻るとしたら、何をする？」など。近くの人とペアになり自分の持っている風船の問いのこたえをシェアしたら互いの風船を交換します。別の人とペアになりまた問いのこたえをシェアしたら風船の交換を繰り返します。互いを知りながら、今日の「健康と社会貢献の関係」について具体的に考えていくための、とっかかりやヒントの時間も兼ねました。

4. 対話手法はオープン・スペース・テクノロジー

今回の「オープン・スペース・テクノロジー」という手法は、ファシリテーターのもと、話の中身（どんなことを話すか）だけでなく、話のテーマ（話題）も、場の人たちで出し合うことが特徴で

す。予定調和はなくすべてがこの場の人々に委ねられます。「4つの原則」と「蜂や蝶の存在」の説明で、全員の自由と主体性が最大限リスペクトされること、安心・安全な場であることが場に示されました。

★4つの原則★

- ・ここにやってきた人は、誰もが適任者である
- ・何が起ころうと、それが起こるべき唯一のことである（＝予想外のこと、ときには場が壊れてしまうかもしれないハプニングも含めて、その瞬間を大切にする）
- ・いつ始まろうと、始まった時が適切な時である（＝話し合いがうまく進まなかったり良いアイデアが浮かばなくても不安にならなくてよい。創造はいつ湧き上がるか誰にもわからない）
- ・いつ終わろうと、終わった時が終わりの時なのである（＝話し合いが予定より早く終わったり、あるいは終わらなくても、無理に合わせなくてよい。早く切り上げて良いし別の機会を準備すればよい）

★蜂や蝶の存在★

- ・蜂…期待と違ったり、自分が十分に貢献できないと感じたら、別の場に移動できる
- ・蝶…どの場にも参加せず休んでもよい。蝶たちが集まり新しい話し合いがうまれる可能性もある

5. 2つの話題

円座になり、話したい話題を出し合います。しばらく沈黙のあと「自分の社会貢献と家族の健康」「活動が続けていく中で心のバランス」の2つの話題が場に出ました。

6. 対話①～③

話してみたい話題のテーブルに各自が移動し、対話が始まりました。途中、心に残るキーワードを付箋に書き留めます。当初は3クールにわたる予定でしたが、第1クールの対話が大変熱を帯びたので第2クールはそのまま延長。第3クールではやはり熱を帯びていた話題はそのまま続行、テーブル移動や休息テーブルの紹介がファシリテーターから再びあり、テーブルのメンバーが変わり対話を行いました。

7. 気づきの共有

円座にもどり、それぞれがいま心に残っていることを共有し合いました。次にテーブルに移動し付箋をみながら各テーブルでおきた話を共有しました。

8. 実際に行って感じた成果と課題

互いの信頼がないとできないプログラムだなと強く感じました。実際みなさんが信頼をもってこの場を創ってくださいました。

じっくりゆっくりできた貴重な時間で、この場にいたことで気づいたこと、感じたこと、考えたことを、各自が大切に持ち帰ったと感じました。私も今も時折反芻し、つづけて考えたりしています。

どのような話が場にあらわれるか蓋をあけてみないとわかりませんでした。いざあけてみると、社会貢献と健康のプラスの関係より、プラスなのかマイナスなのかかわからない、あるいはマイナスかも、とゆらぐ話題が場にあらわれました。また、身近な人とは話づらい話題が場に出てきたことも印象的です。社会貢献と健康の関係はとても複雑なようで、さらに深めてとりこんでいきたいと思いました。

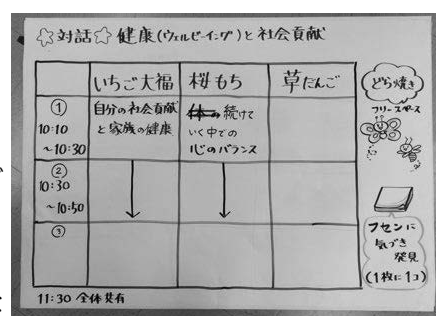
参加者の声（アンケート結果などから）

- ・Well-being って余白のデザインなんだという気づきが最大のお土産でした。
- ・日頃の思いをとてつらに話せる場であった。
- ・ボランティアさんに対してもっと気楽に自由に考えていただくことを伝えていきたい。
- ・大人もたくさんやんでるんだと思う。でもそれに本気になりすぎずでいいなって思った。

企画・運営

藤掛 素子（公募）【主担当・報告書】

高橋 義博（府中市市民活動センタープラッツ／Tripod）【副担当】



No.20 ストップ！食品ロス～私たちにできることを考えよう～

開催目的

日本では、まだ食べられるのに廃棄される食品が、国の統計によると 523 万 t（2021 年）あると言われています。これは、世界中で飢餓に苦しむ人々に向けた世界の食料支援量年間約 440 万 t（21 年）の約 1.2 倍です。この分科会では、食品ロスの現状や高校生の取り組みを知り、私たちができるところを考えました。

開催日時

2月11日（日）13：30～15：30

参加者数

26名（参加者15名：うち会場7名 オンライン8名、
出演者2名、スタッフ7名、ボランティア2名）

出演者

鬼沢 良子さん（NPO 法人持続可能な社会をつくる元気ネット 理事長）
馬場 咲名さん（筑波大学附属坂戸高等学校生徒自主活動団体「マルカート」 代表）



内容・成果・課題

1. 出演者のお話

（1）鬼沢さんより

第五次環境基本計画から謳われた「地域循環共生圏」は、環境だけでなく、社会、経済の統合的な発展が目標で、パートナーシップが重要です。ローカル SDGs とも言われ、脱炭素社会、循環経済、分散型社会の3つの移行を目指しています。

食品ロスは SDGs の 12、13 で謳われています。世界では食べられない地域の人たちもたくさんいますが、非常に多くの食べられるものをゴミにしています。また、その処理のために CO2 を発生させ、エネルギーを使っているのです。食品ロス削減は、SDGs のさまざまなところに関係します。

日本の食品ロスは、事業系が 279 万 t、家庭からも多く 244 万 t、計 523 万 t。食品ロスと最初と言われた時は 600 万 t で、わずかに減りましたが、一人当たり年間 4.2 kg と非常に大きな量です。生産から加工、流通、私たちの家庭で消費するすべての段階で出ています。

食品リサイクル法がカバーする大きな食品製造工場等では、飼料化、堆肥化、最悪、エネルギー回収とリサイクルはされています。ただ、この法律は大きな事業系が対象で、家庭から出るものは、ほとんどが清掃工場で燃やされている現状です。ですから、買い過ぎない、食べ残さない、売れ残らない購買行動で、家庭やお店の食品ロスを減らすことができます。事業系では、外食産業が多い状況です。

家庭系では、封を切らない直接廃棄が、すごくたくさんあります。野菜の皮を厚くむく等の過剰除去もありますが、直接廃棄と食べ残しが多いのです。封を切らずに捨てられる原因は、「賞味期限」と「消費期限」の誤解です。賞味期限は過ぎても食べられます。期限と表せられ、間違いやすく、消費者庁は「おいしいめやす」という愛称にしています。消費期限はお弁当等生鮮品についています。安全のことを考えて、期限内になるべく食べ切って下さいというもの。この誤解から、廃棄が多いのです。メーカーは出荷する時に、出荷後は管理ができず、どういう状態で消費者に届くか心配なので、安全計数をかけた日付をつけます。昔は 0.5 を掛けて 10 日もつものでも 5 日の日付をつけることが多かったのですが、消費者庁は、安全計数は 0.8 以上が望ましいという通達を出しました。

19年に食品ロス削減推進法ができました。10月は食品ロス削減月間として、いろいろなステークホルダーが連携し食品ロス削減の取り組みを行っています。レストランのメニューに笑っている「ろすのん」がついているのを見かけることもあるかもしれません。事業者も「食べ物にもったいないをもういちど」と、普及啓発しています。スーパーでは、「てまえどり」というシールがあります。手前から取れば、期限切れ間近なものから消費していただけます。

食品ロスは、比較的浸透していますが、てまえどりは意外と知られていません。ゴミになる容器包装も進化して、食品ロス削減に大きく貢献している側面もあります。昔はドギーバッグ、今はネーミングを変えて、「mottECO（モッテコ）」という持ち帰り用容器があります。折りたため、何回も使え、デザインも工夫されているので、ぜひ使ってみてください。

（２）馬場さんより

マルカート（Marcato）は、「調理を通して、未来を担う子どもたちの食への意識向上と食品ロス削減をめざす」ことをビジョンに、食育調理教室、食育教室、試食会の主に３つの活動を行っています。2022 年から活動を開始し、メンバーは2～5人です。中学時代に、給食で大量に残ったパンは、生徒に袋を開けさせ、捨てられていました。学校教育で正しい食育がされていないと感じ、活動を始めました。

192 名の中学生にアンケートを行った結果、約50%の生徒が食品ロスの問題を知らないと回答しました。一方、96%の保護者は食育に関心があると答えましたが、60%の人が行いたいができないと回答。要因は、共働きや核家族世帯の増加で、親子の時間が減っている等が挙げられます。

そこで、食品ロスに対する理解の向上、食育の場、食品ロスの削減の３つを提供できる

「MARCATO CREATIVE COOKING 教室」、「MARCATO 食育教室」を始めました。前者は、企業や地域の農家から発生した食品ロスの食材を利用した食育調理教室です。主に賞味期限切れや誤植、規格外野菜等を使って、調理を行うことで食を楽しめ創造力を養い、食への意識向上につなげます。後者は、ゲームを通して、食品ロス削減対策に触れながら、自分たちにできることを子どもと一緒に考えてきました。紙芝居で食品ロスについて学びながら、商品や規格外野菜に触れてみんなで一緒に考えています。食品ロスについて学ぶすぐろくも作っています。調理のスキルも身につけ、低額で楽しめます。放課後に開催するので、子供の居場所にもなっています。食品ロスの削減ができることも大きいです。

課題は、子どもたちが調理のスキルを家では活かしていないことです。そこで、自宅で調理ができるよう、オンライン見守り体制や食材キットの配布等をしたいと考えています。今後の展望として、より多くの子どもたちに届けるため、ビジネスに変えていきたいと思っています。新たに、講師やサポーター等が入ることによって、より質の高い食育を提供することができます。また、企業がスポンサーとなって、食品を提供することにより、子どもを対象としたマーケティング調査等も行うことができます。

2. グループワーク・ブレイクアウトセッション（4グループ：会場2、オンライン2）

私たちができることについて、話し合いました。挙げられた意見は次の通り。「手前取りをする」「食べ切れる量を買う」「ゲーム形式で、フードロスが減る仕組みを伝えるなど工夫したい」「小学校などで企業と連携して、話して頂くような機会をつくる」「野菜の茎も工夫して食べてみる」「値引き品（期限切れ間近）を買う」「フードバンク活動に協力」「食べない物は早めに他人とシェア」「冷蔵庫内の点検」「mottECO を SNS で拡散」「勇気を出して、残り物を持ち帰りたいたいと言う」等々。

3. 成果と課題

食品ロスの現状と私たちができることを実行することの大切さを学ぶことができました。しかし、多くの人達にいかに広げていけるかが課題です。なお、高校生が行う取り組みはすばらしく、参加者にも高校生が多かったことも、成果と言えます。

参加者の声（アンケート結果などから）

- ・手前取りから自分にできることを広げていこうと思う。
- ・高校生の取り組みがすばらしい。こういった活動がヨコ展開に広がるように私の立場でできることを考えたいと思いました。

企画・運営

鹿住 貴之（認定 NPO 法人 JUON NETWORK）【主担当・報告書】

芦澤 弘子（聖学院大学ボランティア活動支援センター）【副担当】



No.2 1 中学生・高校生のボランティア活動発表会 ～学校での取り組みを知ろう～

開催目的

コロナ禍では、学校におけるボランティア活動は一時中止したり、学校と地域のつながりが途絶えたりした印象がありました。そこで、中学生・高校生にとっては他校の活動を知り合う場、地域の方にとっては中学生・高校生のボランティア活動を知る機会として企画しました。

開催日時

2月11日（日）13:30～15:30

参加者数

70名（参加者24名、出演者35名、スタッフ10名、ボランティア1名）

出演者

（当日の発表順で記載）

東京都立赤羽北桜高等学校 社会福祉部

Present Voices Project

東京都立秋留台高等学校 旅する図書館 読み聞かせボランティア

東京都立練馬工科高等学校 ユースボランティア部

杉並区立高井戸中学校 アンネのバラ委員会

田園調布学園中等部高等部 家庭部

トライ式高等学院 白ねこグループ

十文字中学・高等学校 JRC 部



会場のようす

内容・成果・課題

1. 当日の内容

発表者を公募し、応募いただいた8校に活動内容を発表いただきました。1校ずつ発表の後に、質問を受け付け、東京ボランティア・市民活動センターの職員から活動に対してコメントをしました。発表の後に、今後やってみたい活動をグループで意見交換しました。

（1）発表概要

①東京都立赤羽北桜高等学校 社会福祉部

地域のお祭りへの出店や施設でのお手伝い、北区タウンミーティングへの参加、希望者のみ中高生のボランティアグループ「VIOLET!!」への参加など校外での活動を中心にしています。情報発信として、東京ボランティアレガシーネットワークのホームページに掲載しています。

②Present Voices Project

オンラインで全国から集まった高校生、社会人がベトナムの技能実習生志望者に日本語を教える活動をしています。日本に来てからの生活をイメージできるように、日常生活や日本文化についても伝えます。この活動を知ったきっかけは、Instagramからです。

③東京都立秋留台高等学校 旅する図書館 読み聞かせボランティア

保育園で読み聞かせボランティアをしています。将来、保育士になりたいくて今からできることがないか先生に相談したことがきっかけです。同じように、保育士をめざしている仲間とグループをつくり、読み聞かせの練習を一緒にしています。

④東京都立練馬工科高等学校 ユースボランティア部

今年度は校内清掃、近隣幼稚園の運動会や地域のお祭りの手伝い、近隣の高齢者施設の清掃をしました。地域の方にボランティア部があることを知ってもらい、活動内容を増やしていきたいです。

⑤杉並区立高井戸中学校 アンネのバラ委員会

2004年に中学校に贈られた「アンネのバラ」を育てるために発足した委員会です。アンネのバラを地域の方へ一般公開したり、地元の高校・小学校へ贈ったりしています。生徒全員がアンネのバラの育成に関われるようにしたり、隣接する三井の森の腐葉土づくりに参加したりしています。

⑥田園調布学園中等部高等部 家庭部

近くの障害者施設でつくっている商品を文化祭で委託販売したり、キワニスドール作り、食材を使い切る「ごちそうさまチャレンジ」に参加したりしました。

⑦トライ式高等学院 白ねこグループ

「ファッションを通じて患者さんを笑顔に！」プロジェクトを行っています。入院中の患者さんに明るく過ごしてもらうために、アパレル企業からの服の寄付を届ける活動です。アパレル業界が抱える課題解決や企業のイメージアップにつながる活動だと思っています。部活動と違って、先生がついているわけではないので、なにかあった場合のリスクマネジメントを今後検討しています。

⑧十文字中学・高等学校 JRC 部

普段は中学と高校で一緒に活動していますが、今回はやりたいことが別れたので、それぞれの活動を発表します。中学では、地域猫や保護猫活動に興味があり、活動団体にインタビューを行い、自分たちができることとして、タオル類の回収をし、活動団体に寄付しました。高校では、ルワンダについて興味があり、現状を学ぶなかで子どもたちに絵を描いてもらう体験をしてほしいと思い、文房具の回収をし、現地へ贈りました。JRC 部同士の他校とのつながりのなかで、情報交換もしています。

(2) グループでの情報交換

発表者同士で、今後やってみたいことや挑戦してみたいことについて、意見交換しました。

(一部抜粋)

- ・身近にできることが多くあると実感しました。兼部している部活動でも活動してみたいです。
- ・地域との交流を活発にしたいです。
- ・自分たちの学校がやっていることを他の人に広めていくことも大切だと思いました。
- ・他校と連携している学校があったので、ボランティアを行っている中学・高校と連携したいと考えました。

2. 成果

学校におけるボランティア活動を知り、生徒同士の交流する機会をつくることができました。また、ボランタリーフォーラムで行ったことにより、一般の参加者にも知ってもらう機会となりました。部活動でさまざまなボランティアに取り組む学校もあれば、1つのプロジェクトに特化してグループをつくっている学校もあることが分かりました。

3. 課題

今回は公募で募集しましたが、まだ取り上げられていない活動を知ってもらうことや地域の中で、中高生の取組みを広く知ってもらい、応援する人や団体を増やしていくことが必要だと思っています。

参加者の声（アンケート結果などから）

- ・中・高生の皆さんがどのような活動をしているのか、とても興味があった。自主的に活動している姿に頼もしさを感じた。
- ・もっと高校など学校のボランティア部や先生とコンタクトを取っていきたい。学生がボランティア活動報告をする場があることは、お互いの活動に良い刺激となるのでそういう場をつくっていききたい。

企画・運営

渡部 芽生（東京ボランティア・市民活動センター）【主担当・報告書】

市川 徹（株式会社世田谷社／一般財団法人世田谷コミュニティ財団）【副担当】

熊谷 紀良・榎本 朝美・太田 学・瀧澤 利行（東京ボランティア・市民活動センター）

No.22 クロージング「ボランティアフォーラム第20回記念講演」～市民は社会を変えることができるのか？～

開催目的

「市民社会をつくるボランティアフォーラム TOKYO」は、私たちの暮らしにかかわるさまざまな社会問題に焦点をあて、私たち市民にできることを考えるイベントとして、2004 年から開催しており、今回で 20 回目を迎えました。そこで、第 20 回を記念して、「市民は社会を変えることができるのか？」をテーマに元 NHK アナウンサーの堀潤さんにご出演いただき、実行委員とともに、議論を深めました。

開催日時

2月11日(日) 16:00～17:30

参加者数

82名(参加者54名:うち会場33名、オンライン21名
出演者5名、スタッフ23名)

出演者

堀 潤さん(元 NHK アナウンサー/8bitNews)

芦澤 弘子さん(実行委員長/聖学院大学ボランティア活動支援センター)

鹿住 貴之さん(実行委員/04～13実行委員長/JUON(樹恩) NETWORK)

枝見 太朗さん(実行委員/東京都共同募金会)【司会・コーディネーター】

神元 幸津江さん(実行委員/17～19実行委員長/全国災害ボランティア支援団体ネットワーク)

高橋 義博さん(副実行委員長/20～22実行委員長/府中市市民活動センターブラッツ)



内容

1. 報告「ボランティアフォーラム20年を振り返る」(芦澤さん)

2014 年からは、実行委員の公募も始め、誰でも参加できることが特徴です。実行委員会では夜遅くまで議論して、分科会を作ります。400 近い分科会が行われてきましたが、その時々々の社会課題と向き合いながら企画してきました。スタイルもさまざまです。集まることを大切にしてきましたが、新型コロナウイルス感染症の際は、続ける必要があるとオンラインを活用しました。大切にしてきたのは、みんなで一緒に良い社会、未来を作ろうと考えて、話し合うことです。まだ20年。この先も、時代の課題に向き合う市民がバトンタッチして、そのこだわりが日本で続いていくことを願っています。

2. 講演「市民は社会を変えることができるのか？」(堀さん)

NHK に 2001 年に入局し、23 年間報道の世界にいます。災害などさまざまな現場で市民の力を感じ、胸がいっぱいになります。マスメディアで報道される被災地は、悲しみ、苦しみ、不安に覆われていますが、実際に現場で取材すると、逆に、力強さ、温かさ、ユーモア、生き抜いていく底力を感じ、こちらが力をいただきます。その当事者の周りには必ずボランティアの支えがあり、そのつながりにこそ、この国が何度もスクラップ、ビルドしてきた、積み重ねがあることを実感しています。

入局して5年岡山放送局にいた後、東京にきて、夜9時の『ニュースウォッチ9』の立ち上げのメンバーでした。NHK にいた約12年間は、すべて新番組の立ち上げに関わりました。通底していたのは、市民社会と相互にインタラクティブにやり取りしながらニュースを伝えるという考え方です。市民こそ社会を変える源泉であることは間違いありません。市民なき社会は、荒廃した権力のはびこる世界です。自由なき社会、尊厳なき社会。我々メディアの人間に対して、誰の味方なのだ？と憤ることもあります。

災害報道の取材の原点は 2006 年の長野県岡谷市の土石流災害。そこで感じたのは、情報にならない暮らしの苦しさです。何棟損壊、怪我人、死亡者何名など情報として発表され、記録としても残ります。災害現場に立ち合って実感するのは、数字には計上されない、記録にも残せないさまざまな苦労や、そこで生み出された知見を伝えなくてはならないことです。それまでの NHK のニュース報道の中

心は数でしたが、『ニュースウォッチ9』では、現場の緊張感、温かさ、苦労をきちんと伝えようと思いました。災害から1週間経過した際、サイレンが鳴り、土砂災害の危険性が高まっているというアナウンスの後、消防団が山の中に入っていました。その後、隊員がおばあちゃんを背負って降りてきたのです。大切な居場所である自分の家に残っていることを、消防団は知っていて駆けつける。数字には表れませんが、被災地のリアルはここにあると思い、現場の取材を重ねるようになりました。

災害の報道は、現場の皆さんとともに伝えたいと思っています。電波は公共のものですから、みんなが発信したいものを伝えることが本来のあり方なのではないか？パブリックアクセスは、諸外国では整備されてきた誰もが発信できる権利、非常に重要なアクセス権です。テレビは、民放にしろ、NHKにしろ、公共の電波を使っているので、本来であれば、伝えてほしいと言われたら、伝えましょうと相互の関係が成り立つべきですが、構造は一方的で、メディアが選んだ現場しかニュースになりません。SNSが発展し、相互乗り入れが少しずつ広がってきましたが、まだまだだと、NHKを辞め、8bitnews（エイトビットニュース）という市民メディアを立ち上げました。災害時にはLINEのIDも公開して、発信が必要な人は連絡を下さい、一緒に伝えましょうとやっています。

能登半島地震では、偽のSOSを拡散させる方がいました。今回私のところに約230名の石川県や関係者から連絡をいただきましたが、移動しながら現場に向かう途中にLINE電話で全部整理しました。本当の現場の声にはSNSに返ししながら、会いに行く取材をしました。メディアが伝えたいものを伝えるのではなく、当事者の声を伝えるためにメディアがあります。これは、市民が社会を変えることに、メディアがどう貢献するかといった時には、必ず必要な考え方です。

もう一つ、やはりこの道だと思わされた経験があります。2014年の山梨県の豪雪災害です。孤立した集落がいくつも出て、当然メディアも中にも入りません。ニュースではどこの地域が何世帯孤立ということが出ているだけです。ところが、SNS上で、富士河口湖町のホテルに30人近い大学生たちが閉じ込められていて、SOSが断片的に発信されていました。ホテルの電話番号がわかったので、掛けてみたらつながりました。大学生は、「堀さんがいつも言っている、自分で発信するということと一緒にやればいいんですよ？」と、20秒ぐらいの動画を細切れに情報を発信してくれました。それを受け取って発信し、政治家にも連絡を入れて、約6時間後です。夜が明けてきた時に、大学生から、自衛隊が来たと報告がありました。緊急報道では、助けなくてはならない人たちがいるので、使えるものは全部動員してやる必要があると、メディアとしては実感しています。

平時においては、政治家を巻き込んでロビー活動をして、時間かけてじわじわと市民社会で声を上げてということもありますが、緊急時には、可能性があるものは全部つないでいく、つなぎ役としてのメディアの役割ということも必要だと実感してきました。

テレビが特に陥りがちな、一人の被災者の涙を待つという報道が見受けられます。そこには加担したくないと思い、悲しみを探さない、涙を伝えない、ということ日々の自分の報道スタンスにしています。能登半島地震から1ヶ月以上が経過しましたが、現場からさまざまな苦労の声が今も伝わってきます。最近取材した中で力をいただいたのは、ボランティアで駆けつけた芸人・大川興業の大川総裁からの紹介の方です。輪島塗の職人を束ねる商店の店主からメディアの取材を受けると、切り刻まれるから嫌だが、知ってほしいことが一杯あると言って連絡をもらいました。

ほぼすべての職人が道具、工場を失い、作る環境を失ってしまった中、途方に暮れていました。1月に元々ニューヨークで行われる見本市に出展する予定を諦めていたそうですが、職人たちの様子を見て、目標が必要だ、今こそニューヨークに復興した輪島漆器第1号を出して、契約を取ってくると一念発起して、旅立つ日の朝にインタビューしました。漆器は、英語でjapanと言うほど、日本文化に根づいたもので、それらが消えようとしていたのです。

1月2日夜に現場に入りました。1日はアメリカにいたのですが、2日昼に成田空港に着き、SNS上で怪しいSOSが出回っていると知って、これは余計に行かなければと思い、周囲の方と連携しながら情報を得ました。直接個別でやり取りして、どこ町の何番って地番で情報が入ります。地図上ではすぐわかりますが、道路が寸断されていたので、最終的にはタクシーを置いて、徒歩で夜中山越えをして、集落を回りました。同時に、災害現場にはボランティアが駆けつけていて、どこの道路が使えるとか使えないとか、共有しながら進みました。この情報届けば、きっと行ってくれるんだと思うと、我々は伝えることが一つのゴールですが、ボランティアの皆さんと一緒に情報を共有しながら、リアルタイムで入れることは大変心強いです。

今、珠洲の避難所にいる青年とやり取りしています。上海留学から発生5日目に急遽地元に戻ってきて以来、避難所生活。現場のニーズと外の世界の橋渡し役になりたいと戻って来ました。高齢化、少子化、過疎の現場で、ニーズを外に伝えることや、外との中間的な役割を果たすと奮闘していました。3週間経った時、疲れてしまったと。発生直後は、頑張ろうとパワーも生まれますが、心の体力は磨り減っていきます。関連死が増えるなど、いろんな懸念がある中、市民社会が果たす大きな役割としては、第一期に皆さんが頑張った後詰めとして、どれだけ関われるのりしろを広げられるかです。

また、能登町の基幹病院の看護師さんと、LINE でやり取りをしています。理由は、彼女自身のメンタルの維持です。医療従事者は、地域の医療を崩壊させないように動き続けています。彼女に必要な支援は何かと聞くと、制服とのことでした。普段はクリーニングに出しているのに、それができないのです。自分たちが一番清潔でなくてはならないのに、心苦しいと。コロナ患者さんが亡くなり、衛生環境が悪いと自分を責めるのです。このようなニーズは伝わりづらいですが、現場の市民と一緒に発信することで、少しでも改善につながればと思っています。しかるべき機関にどんどん伝えました。穴水町では通信が足りず、通信業界に明るい議員に連絡したところ、通信環境の改善につながりました。

加賀地域の内灘町では、液状化が深刻でしたが、ほとんど現地メディアも入っていませんでした。地域の方々の切実な心配は、激甚災害指定から漏れるかもしれないということ。能登に比べれば、死者も出ていないので、こちらが声を上げると、能登から注意がそれるので、言えないと言っていました。いろんな機関にまた連絡をしたところ、いち早く立憲民主党の泉代表が、「今日は党代表同士の会談があるので、言っておきました」と連絡をくれました。最終的に、能登半島地震被災地全体が指定されることとなります。このことが作用したかはわかりませんが、嬉しかったです。その後、内灘の方が、Instagram で「発信が難しい時代だが、小さな声でも挙げれば変わることを多くの人たちに伝えたい」と。勇気をもらいました。市民メディアは、私たちの代表の代議士をしっかりと動かしていく、これも市民の力だと思いますし、有権者の責任ある行動とも思うのです。今回いろんな政治家に伝えました。有事こそ誰が本当に市民の代表なのかということが浮かび上がります。

去年、アフガニстанを震度7クラスの地震が何度も襲いました。地域の倒壊率 100%と街そのものが壊滅するような甚大な被害が起きています。日本ではピースウィンズジャパンが現地 NPO と連携して支援に当たっていて、現地から写真も送ってもらいながら、一緒に発信しています。サビルラさんは、以前日本国際ボランティアセンター（JVC）の取材をしている時に、そのパートナー団体としてアフガンで平和構築の活動をしていた方です。元はタリバン武装勢力の戦闘員です。戦闘があった村で、薬が足りず、米軍に薬を持ってこいと伝えたと、司令官が、我々は医薬品を持ち合わせてないから、次の部隊に届けさせると、次の部隊が薬を持ってきたそうです。敵と対話することの重要性を感じ、対話を諦めないことを実践しようとしています。子供たちのおもちゃは武器であり、平和が遠く感じるの、条例で武器の形をしたおもちゃは売らないというロビー活動など、いろいろなことをやられています。今回アフガンの地震のパートナーとして、サビルラさんの名前を聞き、驚きました。元々活動している地域は、方角的に真逆のところが被災地です。日本に何を求めますかと聞きました。非常に明確でした。「日本が災害で何度も、何度も復興してきた、その思いを発信してほしい。」と。

去年の取材で忘れられないのは、広島でシリア人ジャーナリストが写真展を開いた時のことです。シリア国内のアーティストたちから日本人に伝えてほしいと送られてきた写真の展示でした。戦争と地震で破壊された北部の町の壁面に『はだしのゲン』が描かれています。この絵が、一番勇気づけるシーンと解説がありました。原爆投下直後に倒壊した建物の下に生き埋めになった家族を何とか救出しようとしている、これがワールドピースだと。「ゲンは絶対に諦めようとしなかった。シリアの街は今壊れて、諦めそうになる。ゲンの家族の命が失われたことは知っているが、諦めなかった姿に力をもらっている。日本は惨状から復興した。諦めないで踏ん張れば、平和が待っていると信じたい。日本人に礼を伝えたい。」と写真を送ってきたそうです。本当に情けなかったです。『はだしのゲン』が学校教材に使うか、使わないかの議論をしていた時です。大切なメッセージを逆に教えられました。

最後に、昨年インタビューしたイエメン出身のタワクル・カルマンさんの言葉を伝えたいと思います。権威主義の国で抵抗して、アクティビストとして女性たちのトップに立って声を上げ続けてきて、当時最年少でノーベル平和賞を受賞した方です。来日された際に、伺いました。パレスチナ・ガザ、イエメン、ウクライナ・ロシア、スーダン、ミャンマー、香港と、国際社会は何をやっているんだ？ということが世界で起きている中で、「国際社会の主語は誰ですか？」と聞きました。クリアに答えられま

した。「国連です」と。「国連は、私たちが二度と戦争を繰り返さないために作った、国際的な市民によるNGOの集合体。国連がまず国際社会の主語である。しかし、今国連の安保理をはじめ、本当に主語が誰かわかりにくくなっている。国連を改革して、市民が主語になるようにしなくてはいけない。」日本に何を期待するか聞きました。「日本には道徳的な力があります。今世界で起きていることにノーと言える先進国は日本しかありません。何故なら、核戦争の被害に遭いながら、何度も大きな災害に見舞われながらも、世界がいくら混沌としようとも人道主義を貫いて貢献をしてきた唯一の国。その日本国がノーと言うことには道徳的な力があります。その力を日本政府の方々にも知ってほしいと思って、今回伝えに来ました。」。非常に大切な言葉だと思いました。

この会は20年間、人々の積み重ねによって築き上げ、守ってきたものがあります。日本のパレスチナ支援は、日本が国際社会に復帰する前の1953年から始まりました。日本がどういう国であるべきかを考えた時に、財政難の中でも同じように苦しんでいる人たちを支援すると当時の政府が決断して、去年は70周年記念でした。

歩みをしっかりと知り、リレーをつないでいきましょう。国内外での連帯が世界を変えるということは、絶対に諦めてはいけないうし、間違いないと思うので、皆さんと一緒にこれからも伝えたいと思っています。お力を貸して下さい。

3. ディスカッション「市民は社会を変えることができるのか？」

- ・鹿住さん：最初の実行委員長と、その前の「めっせ」最後の実行委員長を仰せつかりました。「ボランティアフォーラム」と名前を決める際に納得したのは、「市民社会をつくる」を前につけようと思ったことです。日本では、市民社会は弱く、大きなものではありませんが、過去の報告書を見ると、その時々々の社会問題が分かります。歴史や継続することの大切さをあらためて感じます。小さいからこそ連帯、連携が必要だと思いますし、つなぎ役には誰でもなれるのではないかと思います。
- ・神元さん：企業から転職した直後、前職で東日本大震災の支援に入って感じたのは、人の力は本当にすごいということ。ボランティアの力は小さいけれど、その姿に勇気をもらう住民が多く、この仕事で良かったと思う原点です。能登半島地震では、翌日から現地に入りましたが、NPOやボランティアが寄り添っていることに多くの住民が勇気づけられています。祭りをやるんだと自分たちで頑張る地元の声が上がっています。それを応援できるような、助け合う社会を目指したいと感じました。
- ・高橋さん：最初の公募実行委員です。製造業から転職して前職の2年目に応募しました。転職のきっかけは、社会を変えたいと思ったからです。なかなか社会は変わりませんが、諦めないことが大事だと感じました。

堀さんは力もあり、社会を変えていけると思うのですが、一般の人たちが行動に移せる、踏み出せる一歩というのは、どう考えればいいのでしょうか？

- ・堀さん：社会を変えようと思うと途方に暮れます。全体を見るとそうなのですが、関わった人の変化に触れるとすごく元気になれます。私が知っている〇〇さんの変化に付き合う、一緒になってやっていくことが一番大切だと思います。大変な現場に行って、苦しくならないのか？とよく聞かれますが、逆です。出会った人は諦めていないし、変化を起こしているし、何も変わらないなんて言えません。得体の知れない社会ではなく、社会は個人の集合体。大切な〇〇さんに関わり続けることが大切です。

参加者の声（アンケート結果などから）

- ・活動の大小ではなく、活動が続けること、身近の変化に目を向けること等、とても参考になりました。
- ・「本当に必要としている現場の声」と「正しい情報を伝える」ことの重要性を強く感じました。

企画・運営

枝見 太朗（社会福祉法人東京都共同募金会）
鹿住 貴之（認定NPO法人JUON NETWORK）【報告書】
富安 義樹（生きづらわーほりプロジェクト）
新居 みどり（NPO法人国際活動市民中心(CINGA)）
堀尾 麗華（認定NPO法人難民を助ける会(AAR Japan)）



特別企画 ふれあい満点市場 ～NPO・NGO の作品展示～

開催目的

通販やインターネットでいろいろな物が買えるようになった時代。みなさんは、自分が普段なにげなく使っている物を作っている方を知っていますか。区境ホールで開催したふれあい満点市場では、ボランティアグループや福祉作業所の方が、手作りの作品を展示販売しました。作品には、作り手の想いがこめられています。お買い物を楽しみながら、作品ができるまでのことや、作品を作っている方のことをぜひ聞いてみていただければと思います企画しました。

開催日時

2月10日（土） 11：00～15：00

2月11日（日） 11：00～15：00

参加団体

オレンジライン／かたくり／ジャカルタ・ジャパン・ネットワーク／第二ワーク・イン・あすか／地球の友と歩む会／つばさ工房／東京カリタスの家／東京都青年団体連合／未来の福島こども基金（&チェルノブイリ子ども基金）／東京ボランティア・市民活動センター

内容・成果・課題

昨年は新型コロナウイルスの影響が残る中での開催でしたが、今年は参加団体も多くなり、2日間ともににぎやかな雰囲気で開催することができました。ジャムや焼き菓子の販売もあり、通りがかりの人たちが作り手のみなさんと楽しそうに会話を楽しんでいる姿が印象的でした。



当日の様子

一方で、参加された団体さんからは開催場所である区境ホールの人通りが年々減っているようだとの声もありました。

思いがこもった作品の数々をひとりでも多くの人の目に留めていただけるよう、広報と周知の工夫をしていきたいと思います。



↑ TVAC のブースでは新商品のぼらあめを販売しました



かたくりさんの布ぞうり



東京都青年団体連合のみなさん

企画・運営

岩本 ゆりな（東京ボランティア・市民活動センター）【主担当・報告書】

山本 りさ（東京ボランティア・市民活動センター）【報告書】

特別企画 ボランティア・市民活動情報誌『ネットワーク』 表紙原画展

開催目的

イラストレーターのフローラル信子さんが描く、ボランティア・市民活動情報誌『ネットワーク』の表紙。読者にもとても好評で、ぜひ、原画も観ていただきたいと、毎年、フォーラムの場を借りて原画展を開催しています。昨年度まではA5サイズのイラストでしたが、今年度からは倍の大きさに誌面いっぱい描いていただいています。

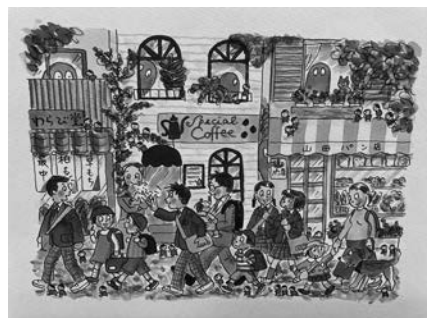
開催日時

2月9日（金）～2月29日（木）

内容・成果・課題

「コロナ禍だったこの数年、オンライン参加しかできなかったのが、原画展を直接観ることができてうれしい」「フリースペースに飲み物やお菓子が置いてあり、お茶を飲みながら素敵な画の鑑賞ができて、気持ちが癒された」といった感想のほか、「イラストをお願いできるのでしょくか」という問い合わせもいただきました。

一方で、「原画展というから、もっとたくさん作品が展示してあると思った。もっと観たい!」というお声もあったので、来年は、過去の原画も一挙に展示できたら、と考えています。



Facebook や Instagram
でも発信し、いいね！を
たくさんいただきました



企画・運営

秋池 智子（東京ボランティア・市民活動センター）【主担当・報告者】
朝比奈 ゆり（東京ボランティア・市民活動センター）

市民社会をつくるボランティアフォーラム TOKYO

開催状況

回	開催年	全体テーマ	カテゴリー
1	2004	「つなぐ つながる つなぎあう」	なし
2	2005	「つなぐ。つながる。つなぎあう。」	一日コミュニティスクール、災害から生をみつめる、IT がつなぐ、街を発見する足たち、アートがまちに作用する、ホームレス問題と私たちの暮らしを考える、私にとってのボランティア、介護をかんがえる、社会の仕組みを考える、虐待を防ぐ
3	2006	「つなぐ、つながる、つなぎあう。」	体験ボランティア入門編、ブラッシュアップ NPO/NGO、社会の課題最前線！、アート、社会のしくみ
4	2007	「気づく、動く、変える、市民の力。」	格差社会、制度・仕組みの欠陥・ひずみ、社会の課題最前線、ボランティアリズム
5	2008	「危機（クライシス）に立ち向かう市民活動」	福祉制度の崩壊から創造へ、環境破壊と創造、ボランティアリズム復活への道、暮らしをみつめて
6	2009	「今、市民として“生きる価値”を問う」	社会の仕組みと制度、安心して暮らせる地域社会づくり、「市民社会」の担い手づくり、お金で買えない価値
7	2010	「希望は市民（わたしたち）が創る」	つながる、発信する、考える、育てる
8	2011	「市民（わたしたち）が創る公共～紡ぎあう地域の絆～」	社会に必要な仕組み、地域とのつながり、育ちあう市民、ボランティアリズム
9	2013	「試される市民力（わたしたちのちから）」	つながり、生活・くらし、若者の市民力、ボランティアリズム
10	2014	「気づく・築く 市民力（わたしたちのちから）」	生活・くらし、地域・居場所、若者の市民力、ボランティアリズム
11	2015	「今を想い、未来をつくる」	グローバルとローカル、暮らしと居場所、ボランティアリズムと組織運営、いまと未来
12	2016	「私たちがつくる あしたのピース」	なし
13	2017	「暮らしの中から動きだす、創りだす。」	地域、居場所、子ども・若者、市民活動・NPO、ボランティア、社会・制度、当事者・多様性、フィールドワーク
14	2018	「つながりをずっと出会いをもっと」	社会・しくみ、コミュニティ、参加のかたち、生き方・はたらき方
15	2019	「イロドリある未来へ～わたしから踏みだす一歩～」	参加・人の力、ダイバーシティ、カタチ、時代・未来
16	2020	「今こそ動こう！イロドリある未来へ～」	今見えていること（社会課題）、未来の課題・未来に向けて今すべきこと、ボランティアな動き
17	2021	「つながるチカラ 新しいカタチ」	地域・居場所など、障害理解・当事者など、ボランティア、新しい取り組みなど
18	2022	「みんなで考える。だから、オモシロイ。」	アフターコロナ・サステナブル、凸凹ライフステージ、居場所、サステナブルボランティアリズム
19	2023	「Think Act Smile◎」	孤立・孤独、地域、多文化、平和・人権
20	2024	「希望ある未来をつくる」	なし

*2012 年は「第 20 回全国ボランティアフェスティバル TOKYO」開催のため未実施

市民社会をつくるボランティアフォーラムT O K Y O2024 実行委員名簿

(敬称略 五十音順)

	氏 名	所 属 団 体	実行委員 経験回数
1	秋本 美帆	中央大学文学部	初めて
2	芦澤 弘子	聖学院大学ボランティア活動支援センター	7
3	市川 徹	(株)世田谷社／一般財団法人世田谷コミュニティ財団	8
4	犬塚 尚樹	NPO法人ふれあいの家 おばちゃんち	4
5	岩崎 克己	玉川学園地区社会福祉協議会（公募）	初めて
6	枝見 太朗	社会福祉法人東京都共同募金会	19
7	鹿住 貴之	認定NPO法人JUON(樹恩) NETWORK	19
8	神元 幸津江	NPO法人全国災害ボランティア支援団体ネットワーク(JVOAD)	10
9	久保 賢人	社会福祉法人中野区社会福祉協議会 中野ボランティアセンター	初めて
10	佐藤 純	NPO法人 Hand Over Japan (HOT)	初めて
11	高橋 義博	府中市市民活動センター ブラッツ／Tripod	9
12	田中 祥子	デロイト トーマツ グループ	初めて
13	富安 義樹	生きづらわーほりプロジェクト	初めて
14	新居 みどり	NPO法人国際活動市民中心（CINGA）	初めて
15	藤掛 素子	個人参加（公募）	初めて
16	堀尾 麗華	認定NPO法人 難民を助ける会（AAR Japan）	初めて
17	村下 初海	コーダえん	初めて

●オブザーバー

伏見 明	東京都教育庁/自由な美術活動空間
------	------------------

●事務局

高山 和久	東京ボランティア・市民活動センター
渡部 芽生	東京ボランティア・市民活動センター
後藤 匠	東京ボランティア・市民活動センター
太田 学	東京ボランティア・市民活動センター

■協賛・協力

< 特 別 協 賛 >

華為技術日本株式会社（ファーウェイジャパン）

西武信用金庫

株式会社三菱 UFJ 銀行

< 協 賛 >

NEC ネットエスアイ株式会社

NPO 法人モバイル・コミュニケーション・ファンド

株式会社熊谷組

公益財団法人 SOMPO 環境財団

公益財団法人 SOMPO 福祉財団

公益財団法人日本社会福祉弘済会

公益財団法人日本テレビ小鳩文化事業団

社会福祉法人テレビ朝日福祉文化事業団

東京都生活協同組合連合会

< 協 力 >

社会福祉法人清水基金

生活協同組合パルシステム東京

中央労働金庫

モンデリーズ・ジャパン株式会社

（敬称略）

❀ボランティアでご協力いただいたみなさま❀

ボランタリーフォーラム実施にあたっては、
14名のボランティアの方にご協力いただきました。
本報告書では、お名前の記載は控えましたが、当日会場で
参加者の案内などを中心に、支えていただきました。

ボランティアのみなさまのおかげで、
無事に全日程を終了することができました。
心から感謝申し上げます。誠にありがとうございました。

また次回、ボランタリーフォーラムでお待ちしております。

●2024年1月1日に発生しました能登半島地震に関しての募金を
ボランタリーフォーラム開催中の2日間（2月10日・11日）に行いました。

2日間で35,062円が集まりました。

募金は全額、中央共同募金会の「ボラサポ」に送金しました。

ご協力ありがとうございました。

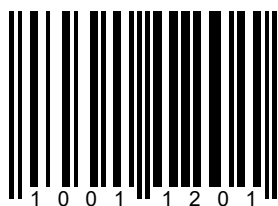
ボランティアフォーラムにご協力いただいたみなさま

フォーラムを開催するにあたり、多くの方にご協力いただきました。
寄付や物品提供等、ご協力をいただいた企業・団体のみなさま、
当日の運営にご協力いただいたボランティアのみなさま、
企画・運営に携わった実行委員のみなさま、
多くの方に支えられ、無事開催することができました。
多大なるご支援・ご協力をいただきましたこと、
心より御礼申し上げます。
誰もが参加できる市民社会を目指し、
活動を続けていきたいと思います。
引き続き、ご支援、ご協力のほど、よろしくお願いいたします。

市民社会をつくるボランティアフォーラム TOKYO2024 報 告 書

〈発行〉 市民社会をつくるボランティアフォーラム TOKYO 2024 実行委員会
事務局 東京ボランティア・市民活動センター
〒162-0823 東京都新宿区神楽河岸 1-1
TEL 03-3235-1171 / FAX 03-3235-0050
<http://www.tvac.or.jp>

〈発行年月〉 2024 年 3 月



(センター管理用)

